

醫
學
校
時
代

目次

一 緒 言	一八	十一 醫學圖書館	三六
二 療病院と醫學校の新築移轉式	一五	十二 卒業式と卒業生	三六
三 校 史	三〇	十三 解剖體祭	三九
四 院 史	三五	十四 學位受領者	三〇
五 校 長	三九	十五 醫學豫備校	三一
六 教 諭	二三	十六 校 則	三三
七 團 體	二八	十七 校 友	三九
八 京都醫學會	三二	十八 追 憶	四〇
九 本校と關係ありし醫學雜誌	三三	十九 文 献	四〇
十 著 書	三三	二十 跋	四〇

醫學校時代

土 屋 榮 吉

一 緒 言

本學の前々身京都府醫學校時代は、恰も明治十三年(1880)乃至三十六年(1903)に相當する。この時代は維新の變革漸く平定して「廣く會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ」の精神に基いて、自主自由、獨立權利の思想がほうはいたる文明開化、諸制度創造の躍進期であつた。明治十三年國會開設の請願はすでに天下に喧しく、翌十四年に政黨初めて生れ自由黨と呼んだ。同十九年はやくも萬國赤十字社に加盟した。二十二年に帝國憲法の發布があり、同二十三年初めて衆議院議員の選舉が行われ、第一回帝國議會の招集があつた。二十七年清國に對して我が國の名譽と利益を防衛するための宣戰が下り、翌二十八年四月その媾和成立し國威大いに揚つた。三十五年日英同盟し、三十六年日露の關係漸く急を告げた。この二十有餘年間政黨は盛に離合し、政治的思想は年々に昂進し、基本的法令は續々と制定せられ、各國との條約は次々と改正せられ、鐵道、郵便、電話は本土を貫通した。西洋醫學もまた他の文化に魁けて最も輝しく發達し、之れに伴う諸般の醫制を整備し、醫育を系統立てた。試みに其跡を尋ねれば、十五年五月政府は醫

學校通則を制定し、在來の各府縣立醫學校を甲乙二種に分ち、大阪・京都・神戸・愛知・三重・和歌山・岡山・仙臺・千葉・金澤・長崎の各醫學校を甲種に指定した。二十七年には岡山・長崎・千葉・金澤・仙臺を官立高等學校醫學部とし、京都・大阪・愛知を公立とし、慈惠醫學校を私立に許した。二十九年帝國大學令を公布し、京都大學を新に増設し、三十七年七月京都帝國大學醫學部を創立した。三十四年三月醫學專門學校令を發布した。

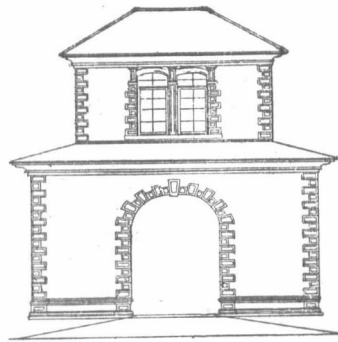
かくて我が京都府醫學校は京都文化の一環として夙に胚胎し、かゝる文明開化の潮流に裊し、甲種醫學校の一に指定せられた。これは明治の初頭、京都の三偉人、京都府知事横村正直、同顧問山本覺馬、同一等屬明石博高の革新的企劃に負うところ大なのである。續いて本校が本邦公立三醫學校の一に數えられたのも、半井澄、猪子止戈之助兩校長の力量の致すところであり、更に公立醫學專門學校の一に昇進し、他日京都府立醫科大學たるの礎地をなしたの

は、校長に島村俊一を得たからである。

二 療病院と醫學校の新築移轉式

本校は療病院と共に上京區元第十二組御車道梶井町（元日光宮里坊、二條、正親町の三舊邸の合地）に療病院敷地八四五一坪餘、醫學校敷地六九三坪餘をトし、約六年の日子を費して新築竣工し、栗田口青蓮院の假病院より移轉し明治十三年七月十八日其式を舉行した。時に京都御駐轡中の天皇陛下御代理として、午前八時伏見宮二品貞愛親王殿下御臺臨あらせられ、校長、助役及優等生三十一名に金圓を御賞賜あり。御歸還後午前十時本府長官臨場、青蓮院時代の生徒十九名に卒業證書を授與し、終て市民に校內を縦覽せしめた。新築の建物は當時最高の施設であつて、講堂

を中心とし、其左右に化學試驗室・顯微鏡室を置き、別に四棟の平屋建西洋館を建て、これを診察室・患者控室・患者應接室・豫診室・吸入室・對客室・食堂・事務室・醫局・製練場・大手術場・電氣室・小手術場・暗室・女科室・



講堂正面

教師詰所・小使室に分割し、他に五棟の病室を建築し、之を普通室と傳染病室とに區劃す。其他土藏・門衛詰所・供溜・廁所等あり、別に教師館を設けた。校舎は三棟の平屋建とし、これを教室・研究室・寄宿舎に分け、別に解剖場・薰蒸室・捨場所を設備した。此新築費六〇、九一八圓九錢、器械藥品代約五〇、〇〇〇圓、他に固定資金一〇、〇〇〇圓内外と運用資金若干である。

起工式のときも、移轉落成式のときも、これを歡喜する滿都の人氣を湧かし、種々の餘興を催して蝶舞雀躍したその盛況は、開都以來未曾有のことゝ云わる。

此日式に校長、知事、銀閣寺住職、元獨逸人教師等が朗讀したる祝辭は、今に残存しあり、左の通りである。

(一) 本年本月本日此院與校建築之功成請知事公閣下之臨場而行開業之式 是實依

皇上恩遇之深府廳勸諭之宜與府民協力之厚矣 然而先輩諸氏之盡力爲今日隆盛之基本亦不少焉 今也三圭承乏教員與在院校之諸賢愈

勉勵以報深宜厚之德又以答先輩之素志

謹祝開業式

京都療病院醫學校長 萩原三圭 頓首敬白

(二) 皇統一系天壤ト共ニ窮リナク世界萬國斷シテ比例ト爲ス可キナキ貴重ノ我日本帝國ニ君臨シ玉フ英聖仁慈ナル天皇陛下ハ親シク大政ニ臨マセラレ深ク人民ヲ愛憐シ玉ヒ庶ノ政令都テ此民ヲ保愛シ玉フニ非ルハナシ 不肖正直職ヲ此府ニ奉シ聖旨ヲ遵奉シ日夜孜々トシテ公衆ノ健康殷富開明ノ民タルニ背カサランコト庶幾フ茲ニ十有餘年 菲薄ノ才識衆人ノ望ニ稱フ能ハス遲鈍ノ性質時世ノ開進ニ追隨スル能ハスト雖モ曾テ見ル所アリ 以爲ラク人々ヲシテ開明ナラシムルハ教育ニヨル 人々ヲシテ殷富ナラシムルハ勸業ニヨル 人々ヲシテ健康ナラシムルハ醫術ニヨル 此三ノ者ハ鼎足相持チ並ヒ立テ偏廢ス可ラサルモノナリト 然リ而テ醫術ノ人々ヲシテ健康ヲ保タシムルハ其學ヲ勉メ其業ヲ勵ムコトヲ得セシムルノ根基最モ要用ノコト云フ可シ 府下夙ニ學校ヲ設ケ勸業場ヲ置クト雖モ療病院ノ如キハ假院ヲ以テ僅カニ其端緒ヲ開キ未タ本院ヲ建築スルコト能ハサリシニ幸ニ教師醫員擔任官員以下耐忍勉勵頓ニ其功ヲ著シ公衆速ニ其要用貴重ナルヲ知り慈惠ノ有志者私財ヲ吝マス資ヲ助ケ新ニ此ノ建築ヲ圖ル 特ニ此院ノ榮譽トシ永ク恩露ノ渥キヲ紀ス可キハ曩ニ内庫ノ金ヲ賜ヒ繼テ宮中ノ屋宇ヲ賜ヒ以テ此美舉ヲ助ケ玉ヘリ 茲ニ因テ終ニ此鴨川ノ清流ニ沿ヒ仙洞ノ名苑ヲ望大氣清潔高樹參差タル良地ニ於テ巍々タル講堂完全ナル諸室建築功ヲ竣シ器械盡ク備リ今日開院ノ式ヲ行フ 此院也廣ク公衆ヲシテ疾病ヲ免レシメ益遍ク人々ヲシテ健康ヲ保タシメ以テ學ニ勉メ業ヲ勵ムノ根基ヲ養成シ殷富開明ノ域ニ進マシメハ庶幾クハ英聖慈仁ノ勲旨萬一ニ報スアラン 不肖正直此盛舉ニ逢フ 感喜ニ堪ヘス 仰テ天恩ノ辱キヲ謝シ俯テ府下公衆ノ無窮幸福ヲ賀祝ス

明治十三年七月十八日

京都府知事 從五位 櫛 村 正 直

(三) 夫惟ニ古今人生ノ保衛ニ於ルヤ疾病是カ大寇タリ 故ニ勉テ此ヲ防キ此ヲ醫治セスンハ有可ラス 倘此ヲ忽ニセハ其害或ハ夭壽ヲ誤マルニ至ル 又假令其患ノ性命ニ關カラサルモ是ヲ憂テ身體健強ナラサレハ萬般ノ作業何事ニカ障礙セサル無シ 然レハ吾人カ務ノ急タル是ヨリ甚タシキハナシ 是療病院ノ無ンハ有可カラサル所以ナリ 此ヲ以テ國家由來蒼生ヲ保育スルノ厚キ其條件古今難算ト云ヘハ就中稽フルニ既ニ千九百五十一年ノ昔天平二年四月始テ施藥院ヲ立テ民ノ病苦アルモノヲ惠ムト 是本邦藥院ヲ置ノ創ナリ 後延暦年間遷都ノ時此院モ引移サレタリ 今愛宕郡東九條村ニ其故趾殘レリト 其院何時カ廢絶シテ又興ラス 空ク名儀アルノ

ミニシテ數百年其實行ハ失ヘリ 輒近有志者此ヲ衆庶ノ爲ニ憂惻スルヤ日久シ 時ナル哉明治ノ維新百慶會興ルノ運ニ際シ特ニ人民保全ノ官令有ヲ以テ其旨ヲ奉シ同志謀テ本府ニ建議スルニ府下ニ療病院ヲ設ケ建テ廣ク衆庶ノ病患ヲ救助セント云ヲ以テス 府其議ヲ採用シ其旨趣ヲ管内ニ布告シ續テ不肖等ニ命スルニ遍ク管下ノ衆庶ヲ勸諭シテ此院ヲ建設スルノ資ヲ寄附セシメント要ス 此時不肖等衆ニ先ツツテ金若干ヲ寄附シ勉テ勸獎ニ周旋驅馳スルコト數月 爲ニ金穀及ヒ屋宇等ヲ寄附スル積累其數萬ヲ以テ計フルニ至ル於此府議假リ院ヲ吉水青蓮門室ノ舊殿ニ設ケ五年十一月十五日ヲ以テ此ニ開業セリ 爾後有志寄附物モ増加シ事業モ又從テ盛ナリ蓋シ四年十一月建議セシヨリ星霜十回ヲ閱シテ本年畢ニ此ノ新築ヲ落慶シ今日更ニ開院ノ式ヲ行フ 實ニ此ノ功業又大ナラスヤ 不肖親シク此筵ニ陪シテ歡喜ノ餘リ滿場千萬人ノ面前ヲ愧ス蛙鳴鶯語以テ祝詞ノ様ニ倣ントス

明治十三年七月十八日

佐々間 雲 巖

(四) 維時千八百八拾年七月十八日京都新病院及其聯屬醫學校ノ開業式ニ當リ余モ亦祝詞ヲ冀望セラル、ノ榮ヲ得タリ 抑此壯麗ナル新築落成ハ全ク之ヲ管スル吏員諸君カ堅忍勉勵ノ彩花此ニ發スル所ナリ 是レ予カ諸君ニ向ヒ先ツ一言ノ祝詞ヲ呈セサルヲ得サル所以ナリ 他ノ諸府縣ニ於テモ已ニ許多ノ病院及醫學校ノ設ケアリト雖モ斯ノ如キ整頓セシ者ハ蓋シ亦比類渺カラシ 之レヲ以テ府廳衛生上ニ汲々タルヲ證スルニ足レリ 曩ニ栗田ニ於テ病院及醫學校ヲ創設セラレシヨリ殆ント九年ノ星霜ヲ經過セリ 其間非常ノ沿革ト非常ノ艱歩トニヨリ遂ニ今日ノ旺盛ヲ致ス 凡ソ學校ノ性質何タルヲ論セス 之レヲシテ盛大ナラシムルノ基礎ハ即チ建築ノ完全不欠ニアリ 然而我醫學校ノ如キハ其建築ニ於テ實ニ完全不欠ト云ベシ 然レ只此一事項ヲ以テ足レリトナサ、ルヤ固ヨリ論ヲ待ス 將來猶今日ノ如ク官民一致共ニ力ヲ此校ニ盡シ且ツ善良ノ學生ヲ續々養成スルヲ以テ要ト爲スコト知ル可シ 抑此善良ノ學生ニ於テ都鄙ノ民其幸福ヲ受クルヲ得ハ是レ即チ此校教育ノ好結果ト云ベシ 故ニ學生タル者自カラ其任ノ重キヲ體シ益奮勵此校ヲシテ彌盛大ノ域ニ至ラシメハ特ニ此校設置者ノ榮而已ナラス又國家ノ鴻益ト謂フベキ也

千八百八拾年七月十八日

ルードルフ、レーマン謹祝 吉賀耕作謹譯

(五) 夫レ開明ヲ導キ富有ヲ謀ルハ醫學ヲ振興シ病院ヲ隆盛スルヨリ切ナルハナク苟モ健康ナラサレハ百業盛ナル能ハス教化行ハル、能ハス 仍テ明治五年十一月有志輩ノ寄付スル金若干圓ヲ元資金トシ教師ヲ獨乙國ニ聘シ公立病院ヲ愛宕郡第二組粟田口村ニ設立シ元資金ノ利子ト年々ノ收入金ヲ以テ維持シ專ラ患者ヲ診療シ生徒ヲ教授ス 同七年十一月上京區第十二組梶井町ノ官地六千九百四十九坪餘ヲ拜借シ其周圍ニ木柵ヲ建ツ 同十年二月假院御代覽アラセラレ御金若干圓次テ 御所内ノ御建家ヲ賜ヒシヨリ有志輩感奮シテ協力出金シ遂ニ公立病院醫學校教師邸ノ三建家合一千三百七十二坪餘ヲ新築シ本年七月其功ヲ竣ス 乃チ本日ヲ以テ開業式ヲ行ヒ益々院校ノ規模ヲ擴張シ博ク患者ヲ診療シテ非命ニ斃ル、モノヲ勵カラシメ勉テ生徒ヲ教育シテ郡村ニ良醫多カラシメントス 此ヨリ健康ノ緒ヲ緇キ工業盛ナリ教化行レン 何ノ幸力之ニ過シ 余ヤ不敏ト雖モ聊カ數言ヲ述ヘ以テ知事公ノ渥意ニ答エ併テ土木掛ノ勤勞ヲ謝ス

十三年七月十八日

京都府五等屬 李家 隆彦

明治十三年八月刷行醫事集談第十九號に「京都療病院醫學校新築移轉ノ概略」なる記事あり、甚だ興味あるを以て重ねてこゝにこれを載録する。

該院新築の位置結構たる、地を上京區第十二組の六千九百四十餘坪にトシ、巍然たる樓厦其正中に聳る者を講堂とす、其兩側に小講堂を聯屬シ廻廊以て左右屋宇に連亘す、右を生徒寮とし、左を病院及諸局場とす、殊に本日の裝置たる正堂の中央東上、親王殿下の臨席を設け、右側の小講堂を掃て其御休憩に供し、左側小講堂には、各種の學問上諸器即顯微鏡「プレバート」の類を陳列す、左側廻廊に沿て路を病室に取るに、其第一棟東南隅を診察場とす、診察寢床、檢尿器械、常用諸器棚等を布置す、右に折すれば、教師休憩室、小手術場（常用器械排列）、檢眼檢喉室、電氣療室、女科室（皆其器械裝置あり）等左右配置、其當頭を大手術場とす（東面は木埵連榻を排架して施術に供し西面は百般器械を陳列す）、左に出れば中庭を宏開し、其中を遮斷するに廻廊を以てし、曲折して第二病室に通す、廻廊の東右を患者溜とし、左を藥局及製藥場とす（瓶棚及蒸發器等の裝置精巧）、廻廊の西右を患者應接局・舊患

診察場・吸入室・庶務局とし、左を醫局・學事局・出納局とし、對向を待客所及食堂とす、廻廊に沿て北行東折藥局の後面に至れは、又茲に一の中庭と、之を遮斷して北に亘れる一箇の廻廊を得る、之に沿て第二棟病室に達すれば、中央當頭を醫員詰所とす、看病人々に待候し當用器械を具ふ、其左右兩室は盡く總室・各室を區分排列し、臥具看病一切の設立に稱ふ、此の兩大室の齎端には、各浴室を具へ、其側傍には亦各水槽湯樋の結構あり、機管裝置を以て冷水溫湯を各管に浴室に取り、以て發汗浴ゾーシー諸療法に便す、右方の浴室より廻廊兩折、左に赴けはキリニッキ病室の一棟あり、左地道に赴けは傳染病室の一棟あり、此道傍には檢尿室及看護人休憩所等を具へ、其右室末端に於るも亦然り

干茲明治十三年七月十八日午前第八時、其開院式を行ふに先ち、伏見親王殿下の御代臨を賜ふや、院校長豫科本科の三教師、院內諸員奉迎す、既に正堂に臨席あれば、府知事の接引を以て一同敬禮、院校長三教師進て謝意を上し、豫科生一名理科の一則を講す（本科生一名脚氣病論を講すへきの備なりしか事故あり止む）、既に畢て病室各局前記の裝置を巡覽あり、次て御登車一同奉送す、右畢て直に開院式を行ふ、乃ち午前第十時、府知事正堂の東面に着席、院校長三教師、院內諸員、府廳衛生課及各課吏員、區戸長、管內醫務取締副長、各醫務取締、本院事業勤務家、東京醫學部の當院貸費生、當院各生徒等左右排列、隣府縣の病院醫學校校長亦臨席せらる、三教師進て祝辭を朗誦し、次て院校長、次て醫局四名、藥局一名、醫務取締副長一名、當院事業勤務家二名、府廳衛生課吏員二名、然して后に府知事の祝辭あり、畢て府知事親く本院事務勤務家に向て慰勞の言辭あり

右畢て直に生徒卒業式を行ふ、教授某、乃ち進て優等生以下に卒業證狀各一葉を授與したる后、教師及某が生徒に向て將來を訓戒獎勵する所の諭言二章を譯述及演説し、畢て優等生二名遞進て謝辭を呈す、一は日本文を以て之を公衆に鳴し、一は獨逸文に譯して之を外國教師に聞す、右畢て東京醫學部當院貸費生一名進て祝辭を朗誦す、蓋し開院且生徒の卒業を兼ね祝するの意なり、畢て府知事各生徒に向て訓戒責任の言辭あり

以上の三典畢て、公衆縦覽を行ふこと二日間、夫の親王行啓の國薄や、都人士雜沓の景況や、妓娼編隊の華麗や、猿樂興行の記すへ

き者に至ては、之を普通新聞家の筆權に托し敢て其好種子を尊はす、今茲には其本科教師ドクトル胥乙邊の祝辭を採輯して、以て本記事の局を結ふと云

京都療病院ノ創立タル茲ニ八周年此間其數多ノ病苦ヲ救療若ハ輕快セシムルモノ果テ其幾許ナルヲ知ラス 此病院ノ結構ニ於テ一ノ醫學校ヲ具シ創立以來日々斯道ノ研究ヲ怠タラズ以テ幾多ノ生徒ヲ養成セリ 此生徒ノ一ニハ既ニ本院ニ從事シ治術介助ノ任ニ堪ル者アリ 爾他ノ儕輩ハ醫師トナツテ畫錦ノ榮ヲ荷ヒ以テ其郷人ノ幸福トナラントスル者アリ 茲ニ本日集會スル所ノ斯病院醫譽ノ盛儀アリ 是レ即チ近頃完全美麗ノ一鳩工ニ斯院譽ヲ移轉セシムル所ノ祝式是ナリ 此祝式タル獨雷斯病院醫譽ノ榮ニ關係スルノミナラス即チ之ヲ全都府ノ一大美事ト云モ敢テ不可ナラザル所ナリ 今此完好ナル新結構ノ世ニ公表セラル、所ノ者ハ蓋シ全府釀金ノ由ヲ以テ構造セル所ナルガ故ニ是レ此公衆ノ恩力ニ向テ感謝セザルベカラス 因テ吾輩ハ切ニ希望ス 此完好ナル病院醫譽ノ將來愈隆盛ニシテ全市郡ノ幸福トナリ以テ公衆ノ恩力ニ報ルアラシコヲ

教師 ドクトル シヨイベ

田中綠紅の著「明治文化と明石博高翁」に「京都府療病院と醫學校創立」なる記事あり。記事中創立式に關して、「此式を舉げるに當り、何時も用意周到の楨村知事が、此日に限り平然として居られるので、(明石博高)翁は念のため豫定の舉式順序書を示し打合せたところ、知事は翁に對し、『本院は元來貴公の發議に出で、又今日の盛大を來したのも全く貴公の努力に外ならぬから、今日の式は貴公が主人公となつて舉げてもらひたい、予は單に來賓として出席する考である』と云はれたので、翁は當惑して、『病院のことに盡力するのは、自分醫師としての本分であり、今日の盛大は知事閣下の德望と指導宜しきを得たる結果であり、且府立のものなればその長官たる閣下が式を舉げらるゝのが至當である』と、論辯したれど知事は頑として聽かれず、止むを得ず用意の祝辭に訂正を加へて、知事の意に従つた。翁の讀んだ祝辭は左の通りである。」と云う記載あり。

京都府療病院新造慶讃文

醫ハ民ノ癘ヲ診シ蒼生ヲ壽スル世道ニ裨補スル大且博シ矣 博高曩ニ明治四年醫方興立ノ舉ヲ本府ニ申稟シ療病院

ヲ設ケ以テ群生ノ疾患ヲ救フ事ヲ議ル 有志者此舉ヲ賛シ資材ヲ寄ル許多ナリ 因テ獨逸國ノ碩學伊傑兒氏ヲ聘シ教師トシ明治五年八月東山栗田ノ舊官第ヲ以テ假院ヲ開キ爾來衆病ヲ醫シ子弟ヲ教導スル茲ニ九箇年 而シテ相定セル鴨漣ノ本院新造今ヤ完成シ門廊講堂醫局藥房病舎學寮典籍器具咸ク備レリ 回顧スレバ拾歳ノ往シ此議發リテヨリ博高之レヲ擔任シ微塵ヲ集メ寸志ヲ拾ヒ爲メニ世ニ募ルニ力メタリ 有志渴仰ノ泣ト積善ノ聲ト俱ニ此果ヲ成ス 捐財喜捨有志子ノ功績實ニ錄スベシ 况ンヤ

至尊恩賜ノ特典ヲ蒙ル在ルヲヤ 夫レ生民ヨ萬病是レニ因テ以テ生ヲ回シ天知ヲ頌養シテ太平ノ春ヲ享ケ聖天子天下ヲ仁壽シ玉フノ化ヲ樂ン事ヲ 本日新院開闢ノ典ヲ命シテ博高ニ之レヲ舉シム 博高恭ク式ニ莅ミ慶賛ヲ舉ゲ

明治十三年七月啓敘焉

京都府衛生事務一等屬 明石 博高

追て療病院創立を記念すべき記念碑が後日病院玄關脇に建設せられ、それが今に嚴存している。

療病院碑

人而疾病也耶 欲學弗能也 人而低羸也耶 欲勉亦弗能也 弗學焉 弗勉焉 何以殖其才而富其家乎 夫人材乏而民戶貧者 乃國之病也 是故施政之務 未有急於除民疾病而保其健康者也 我府奉維新之聖旨 夙行種痘術 布驅疫法 遠徵名醫於海外 以改良衛生醫藥 方將有大所救濟矣 明治五年 始以京東栗田青蓮院爲療病院假院 而其未及遽築本院者 蓋以鳳駕東遷後京地衰弊 民不堪其費也 於是抑浮業 省冗費 更示積細成大之法於民 大謀築造 繼而捐金助費者 歲多一歲 至七年十月 遂相攸於荒神口今地 後三年 鳳駕西巡 親賜內庫金貳千五百圓及宮中廊屋 以嘉賞此舉 於是本年七月工事告成 蓋自勦謀築造 至是爲歲凡九年 而其費金凡五萬九千三百十有一圓 嗚呼起業之難可以知也 今量其地之廣狹 凡可二百畝 而其所築講堂三 病室二十有九 有手術之場 有

診察之所 自製藥局 至教師館醫生寮 結構之完備可觀也 夫如此者苟非聖旨昭於上民心奮於下 則終不能成此完備也 自今而後
除民疾病而保其健康矣 非難也 庶幾乎後之爲政於斯土者 能思其始而善其終 莫敢有廢墜焉 俾斯民永濯明治皇澤矣 因記其顛末
使刻於石以告後人云

明治十三年十二月 京都府知事 從五位 榎村正直 撰文 京都府四等屬 中村勲 敬書 二品大勳位熾仁親王 篆額



瓦 號

碑文にも明記されてある通り、この病院は初め一定の府費を以て作られたのではなく、府下民衆よりの醸出金や寄付金で出来たものであるから、名は府立であつても、實は官民共立又は公立の性質を有つて創立されたのであるから、後世の人士はこれを銘記すべきである。

附記

(1) 講堂の屋根棟瓦兩端に鰹瓦ありて、これが外觀に特異の風彩を與えていた。この鰹瓦に就て左の如き興味ある古文書が遺つてゐる。

療病院ニ鰹瓦寄附願

一、鰹瓦二個

但シ高サ四尺五寸幅二尺六寸

此代價拾五圓也

右ハ今般療病院御新築相成候ニ付テハ講

堂棟瓦兩脇ニ右鰹瓦寄付仕度

右瓦ハ舊龜岡城天守家棟に相用有之候處

先般石天守御拂下ケニ相成候ニ付 其儘宜敷所持罷在候間

何卒右講堂家棟瓦ニ御採用被成下候ハ、難有奉存候 依テ此段奉願上候也

明治十三年二月廿三日 上京區第十三組玉植町森川喜

兵衛 京都府知事榎村正直殿

右之通申出の間依テ奥印仕候也 戸長皆山源次郎 書面神妙之義ニ付聞届候事(朱書)

(2) 講堂には上棟式に左の棟札が掲げられた。

京都府知事從五位楨村正直

神武天皇

即位紀元貳千五百四拾年
明治十三年二月五日

上棟

大工棟梁 三上吉兵衛
石工棟梁 岡野傳三郎
建築事務主任五等屬 李家隆彦
建築現業主任七等屬 世良鶴三

(3) 京都府知事より療病院に對し、十二年六月二十八日附「金壹萬五千圓也 右御東幸之節下賜之產業基金拾萬圓之利子之内ヲ以其院大講堂建築費トシテ可拂出候云云」の文書が残つてゐる。前記楨村知事祝辭中の「内庫ノ金ヲ賜ヒ」に相當するものならん

か。

恩賜館



(4) 知事祝辭其他に「宮中ノ屋宇ヲ賜ヒ」とある、これに關する記録を物色するも、たゞ和紙四十有餘枚の表紙に「御所御建物本府ヨリ送附品目帳 明治十三年三月十三日 療病院建築所出張土木掛」と記せる古文書が見付つたのみである。筆者在學當時は、貫通廊下に沿うて、他病棟と不釣合なる大廣間二間の病棟があり、學用患者收容に當てゝあつた。それが所謂恩賜の屋宇であつて、此品目帳通り院内に運搬せられ、御所内に在りしまゝ建て直したるものと思う。後病院改築の際、此建物も取除かれ、その材料にて小棟を新築し、恩賜館と稱して看護婦療養室に充當されていたが、この記念小棟もいつの間にか其跡を絶つたことである。

三 校 史

明治十五年(1882)十一月 文部省達醫學校規則に準據して、本校を甲種醫學校と認定せらる(甲種とは尋常の學科を教えて醫師の大成を圖り、乙種とは簡易の學科を教えて其速成を圖るもの)。同年一月 校規を整頓し、病院にクリニック患者を設く。當時生徒數一四九名。既に本校は外人の手より全く離れていた。

十六年三月 本校々則を改正し、教則試業則及寄宿舎々則を制定した。このとき本校の修業年限は滿四年六ヵ月九學期である。同年十月 本校卒業生は内務省醫術開業試驗を要せずして、開業免狀を受くこととなる。醫學志望者の数を負うもの漸く多し。教室一棟を新築す。

十七年六月 平家造西洋館を新築して事務所とす。

十八年一月 本校々長は奏任待遇となる。

二十年五月 勅令第四十八號を以て、府縣立醫學校に府縣費の補助建設を禁止せらる。

この勅令は全國府縣立醫學校の上に一大波瀾を來した。全國を通じ、各府縣殆ど醫學校を有せざる處なき迄に發達せし醫學教育に一頓挫を來し、學校若くは病院等にて、獨立に經營し能わざるものは、悉く廢校の悲運を見るに至った。同時に甲乙醫學校の學制も全く廢せらるることとなる。我校は幸にも大都市の中央に存在し、院運日に隆盛にして、且他に對抗するの大病院もなく、良く病院の收得を以て校院を維持經營していたので廢校の厄運を免がれたのである。我校が府立の冠稱を有しながらも特別の經營を以て獨立し、府より一半貨の補助を仰がざりしは當時本校の聊

か誇となすところであつた。

二十一年五月 從來學校は病院の北側にありしも、南側に一棟平家建西洋館を建築しこれを教室とす。各教室に別室あり。他に解剖室・標本室・實習室・準備室・生徒溜を設く。

二十二年一月 本校生徒の制服を定む。四月 附屬産婆養成所を設置す。五月 徴兵令第十一條により本校卒業生を中學程度同等以上と認定す。十一月 本校生徒心得を改正す。

二十三年四月 一棟の平家建西洋館を建築し、内科學及産婦人科學教室とす。十二月 教育勅語謄本を拜領す。

二十四年四月 陸軍省令を以て、本校卒業生は陸軍一年志願兵を志願し得ることとなる。また服役後、現役衛生醫官の候補生になることが出来る旨達せらる。六月 一棟の平家建西洋館を建築し、眼科學教室とす。

二十五年九月 生理學教室として平屋建西洋館を建築し、暗室・副室を備付す。

二十六年一月 外科大手術室の新築落成す。十一月 本校にて日本赤十字社京都支部看護婦を養成することとなる。

此年本校生徒人員 一年九四 二年七一 三年七八 四年五三 計二九六名、本年定期試験成績 一年及第五五・落第二四 二年及第四四・落第二二 三年及第四五・落第三三 四年及第四一・落第六 缺席者 一年一二 二年五三年一〇 四年二名

二十七年末 本校概況 職員 校長一 教員一一 書記三、入學應募者一九二 合格者七八 編入九、卒業生三五 半途退學者三七 年末生徒總數三一一名

二十七年七月 校則を改正す。校則左の如し。なお二十八年十月にも改正あり。

京都府醫學校規則

第一章 總 則

第一條 第一年級に入るを得る者は滿十七歳以上品行端正にして入學試験合格者若くは府縣立尋常中學校卒業證書受領者とする

第二條 二年級以上に入らんと欲するものは第一條の年齡にして本校と同等以上の學科程度と認めたる官立府縣立醫學校修學者に限り相當學級に編入することあるべく、その他は學歷詮議の上入らんと欲する前級迄の諸學科を受験せしめ入學の許可を定むることあるべし、但受験者は受験料金壹圓納付すべし

第三條 相當の事由なく半途退學を欲する者は事由を保證人連署で願出づべし

第四條 生徒並保證人轉居の際は届出づべし

第五條 依願退學及除名せられたるものにして原級以下に再入學を請ふものは許可することあるべし

第六條 生徒は品行方正にしてなすまじき所業あるべからず

第七條 休日 大祭日、日曜日、一月一日より七日迄、十二月廿五日より卅一日迄、夏期七月十一日より九月十日迄、定期試験前

二週日後三日

第八條 毎年三月生徒募集

第九條 入學志願者は左書式の願書正副二通差出すべし（願書式省略）

第十條 入學許可の上は左書式の證書を差出すべし（證書式省略）

第十一條 入學試験を分て二種とす

其一 體格検査 第一項 身體検査

其二 學力試験 第一項 物理化學動物植物 第二項 和漢文 第三項 ドイツ語 第四項 算術代數幾何

第十二條 不都合の行爲ありと認めらるゝ者は放校に處す、但明治二十七年二月内第二十二號第三項により放校されたものは文部大臣により特免することあり、他は復校を許さず

第十三條 左の各項に當るものは除名する事あるべし 第一 授業料未納、第二 第三章試業則第二十七條に悖背せるもの、第三 第三章試業則第四十二條後項の試業をうけ落第せしもの、同第六十四條の再試業をうけ尙及第する能はざるもの

第十四條 (省略)

第十五條 授業料は一ケ年金貳拾圓とす、但入學期より卒業期迄

第十六條 授業料納期は四月十月に半額づゝとする

第十七條 既納の授業料は返付せず

第二章 學年及學科程度

第十八條 修學年限は滿四年とし之を四學年に別ち各學年を前後二學期とす

第十九條 各一學年中授業日數は大約四十週とする

第二十條 學科程度表(略)

第二十一條 臨床講義は本校クリニック患者及府立病院に於てす

第三章 試業 則

第二十二條 試業を別ち二種とす 其一定期試業、其二卒業試業

第二十三條 生徒は必ず二種の試業をうけるべきものとす

第二十四條 試業期中缺席すると豫料するものは診斷書を添へ届出づべし

第二十五條 試業定日に當り缺席するものは速に府立療病院の診斷書を添へ届出づべし

第二十六條 試業委員の授くる問題に意見を述べることを許さず

第二十七條 試業成績の評點に不服を訴ふることを許さず

第二十八條より第四十四條迄省略

第四十五條 此試業に及第せしものに左の證狀を附與す（卒業證省略）（採要）

三十年十一月 京都府會沿革史に本校の獨立經營に關し左の記事あり。

明治九年設立に係る中學獨逸學校を校内の豫科醫學校に併せ、醫學豫科校と改稱し地方稅經濟に移せり。十三年度に至りて醫學校を開設し、十四年度に於て醫學豫科校を合併し大に教科を改めたり。爾來連年繼續せしが、明治二十年限り地方稅經濟を離れたり。之れに従ひて療病院は醫學校と經濟を合し特別經濟となりしが、二十三年内務省布達に基き二十二年度より地方稅經濟に屬す。その經費は院の收入學校の授業料を以て支辨し、一經濟を組成せること従前の如く、年々資金準備金を増加せり。

三十一年四月 本校々則第二十條を改正して、授業料を管内在籍者及全戸寄留者一カ年二十圓、管外在籍者及寄留者二十四圓とす。五月 陸軍省醫務局より陸軍々醫依託生徒の養成を委託せらる。六月 本校東南空地に體育場及標本室を新築す。

三十三年九月 海軍省告示を以て、本校卒業生は海軍武官補充條例により、海軍少軍醫候補生に採用する旨指定あり。十二月 京都帝國醫科大學の設立に伴い本校の人材數多拔取られ、本校の存廢問題擡頭せしも府會にて討議の末存續に決す。

三十五年三月 校則を改正す。改正事項左の如し。

第四條 學期を分て第一學期（自四月十五日至九月十日）、第二學期（自九月十一日至翌年一月七日）、第三學期（自一月八日至四月十四日）とす 第五條 學科は解剖學・組織學・生理學・病理學・藥物學・內科學・外科學・眼科學・產科學・婦人科學・精神病学・衛生學・法醫學・醫用動植物學を正科とし、倫理學・獨乙語・物理・化學・體操を副科とす 第七條 休業日は大祭祝日、夏季冬季春季休業、日曜日の外、本校紀念日の十月十五日とす 第二十二條 學年及卒業試験に於て引續き二回落第したるもの若くは三回學年及卒業試験期を経るも原級に止るものはその旨を論し退學せしむ 第二十七條 學期及學年試験成績は甲乙丙丁戊の五種とし左の標準により及第及落第を評定す（標準略） 第三十條 卒業試験は理論及實施に就き第一及第二試験の二種に分つ 第一試験科目 解剖學・組織學・生理學・病理解剖學・藥理學 第二試験科目 內科學・外科學・眼科學・產科學・婦人科學・精神病学・衛生學 第四十條 第四學年試験に及第したる後卒業に至る間を溫習生と稱し志望の學科につき溫習せしむ 第四十二條 學力優等品行方正なるもの十二名を選抜して特待生とす 第四十六條 本校卒業生は京都醫學得業士と稱することを得、但本規則實施以前に卒業したるものは論文を提出し稱號を請求することを得（摘要）

三十六年一月 校內南西の空地に病理學、衛生學兩教室を新築し、內科、婦人科、產科及精神病科の研究室を増築す。六月 専門學校令に據り、本校は他の官公立醫學校と共に難なく京都府立醫學専門學校に昇格し、同時に其校則を制定した。

四 院 史

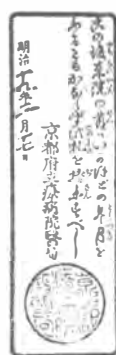
明治十三年（1880）十四年頃、療病院に於ける職員の月俸は、外國教師金貨五百圓、院長金百五十圓、校長金百參拾圓、助教金四拾圓一人（十四年は五拾圓一人）、當直醫金七拾圓一人（十四年も同じ）、金貳拾圓三人（十四年は參拾圓二人）、拾五圓一人（十四年は貳拾五圓一人）であつた。

また十四年當時の療病院治療條則是左の通りである。

療病院治療條則（拔萃）

第一章 第十條 診察料 管内患者ハ隨意タルヘシ 管外患者ハ初診金五拾錢其後診察五回毎ニ金五拾錢ヲ納ム 第十一條 藥價ハ其配合藥品ノ元價ニヨルモノナルカ故ニ豫メ一定セス、隨時出納係ヨリ之ヲ申達スヘシ

第二章 第八條 入院料 入院料ヲ分チ一等入院料二等入院料ノ二種トス、一等入院料ヲ納ムルモノハ一患者毎ニ一室ヲ給與ス、二等入院料ヲ納ムルモノハ數患者ヲ一室ニ雜居セシム、其料左ノ如シ 管内患者一等入院料一週間諸費 一金貳圓四拾錢八厘 入院



診 察 券

料一日金參拾四錢四厘、但病症ニヨリ別撰食ヲ與フレハ右ノ外參拾壹錢五厘ヲ増ス尤モ藥價ハ此外ナリ 管外患者一等入院料一週間諸費 一金參圓拾八錢五厘 入院料一日金四拾五錢五厘、但書同様ニ付略ス 管内患者二等室入院料 一週間諸費 一金壹圓參拾壹錢六厘 入院料一日金拾八錢八厘、但書同様ニ付略ス 管外患者二等室入院料一週

間諸費 一金壹圓七拾八錢五厘 入院料一日金貳拾五錢五厘、但書同様ニ付略ス

此年、木下潔が療病院の附屬京都府假驅驅院院長となる。

十五年五月一日 附屬驅驅院新築開業式を舉げ、同十八年江阪秀三郎が院長となる。十月京都癲狂院廢止となる。

こは本邦公立精神病院の嚆矢であつたのに惜しいことをした。

十八年十月 療病院第一次年表刻成る。この年報は療病院創立、即明治五年より全十四年に至る十年間の沿革を概記し、明治十四年現行の規則及び職員・患者・解剖の年別諸表を登載し、療病院縮圖を付けている。試にその二、三を記してみると、十三年中の外來患者數は四、三八七であつて、これを病類別すれば、流行病一八三、全身病二五

七、神經系病四〇四、血行器病九八、消化器病七五八、泌尿器病二〇六、生殖器病一四〇、皮膚病及梅毒六二六、外科的病七五二、眼病三七六、未定病一一〇となり、呼吸器病〇となっている。十四年入院患者總數は六四〇であつて、詳細にその病種別數を記してあるが、この内呼吸器疾患は九六で、潜伏肺癆一二、肺癆三二、慢性肺炎一しかない。また京都癲狂院に入院したる十四年の精神病者は、合計一八八となり、その病種別は、癲狂六一、内全治四二死亡一〇、自尊狂一二、内全治四、鬱憂狂二九、内全治三、德行狂一三、内全治五死亡一、癲狂一九、酒癖六、内全治三死亡三、失神一五、麻痺一、未診定七となっている。なお十四年の剖見數は六體である。

二十五年 此年本院治療患者數總計一二、八六五名 内、入院患者男七三六 女三五九 外來患者男七、九六〇 女三、八〇〇

二十七年六月 昨年十月以來増築に従事せし各診察室は五月落成し、本月六日より移轉す。外來患者一日平均三百名以上、入院患者百四十名内外、爲に病室缺乏を告ぐ。依て引續き病室増築に着手す。落成の曉は、眼科部を分て患者溜室・診察室・暗室・研究室とす。内科部を分て検尿尿室・暗室・電氣室・患者溜室・副診察室・本診察室・研究室とす。婦人科部を分て患者溜室・診察室・第一耻室・第二耻室・研究室とし、各室毎に電話機を築増す。

九月 舊醫學校々舎を取拂い上等病室を増築し、これを二棟にして、一棟を二十餘室とし各室に副室を備付す。此年附屬驅黴院は第一次年表（明治九年——全十九年）を發行した。

二十八年十一月 診察料等を改正す。左の如し。

京都府療病院診察科其他

一、診斷書及處方書手數料 通常診斷書金五拾錢 特別診斷書金貳拾錢 處方書金貳拾錢

一、診察料 其量ノ多寡隨意タルヘシ 單ニ診察ノミ請フトキハ金五拾錢ヲ納ムヘシ

一、往診料 京都市並接續郡村 部長 通常往診金壹圓 急往診金壹圓五拾錢、醫員 通常往診金五拾錢 急往診金八拾錢 郡村

及他府縣ノ往診料ハ略ス

一、入院料 一等室金七拾錢、二等室金五拾錢、三等室金參拾五錢 傳染病室ハ二等入院料ニ準シ納メシム、特ニ營養品及療養品ヲ要スルトキハ入院料之外別途徴收ス

一、手術料 大手術料 一等金五圓、二等金參圓、三等金貳圓、四等金壹圓 小手術料 一等金五拾錢、二等金參拾錢、三等金拾五錢、四等金拾錢、五等金五錢、特ニ治療品ヲ要スルモノハ手術料ノ外別途徴收ス

一、藥價 內用劑 水劑一日分金七錢、丸劑一日分金七錢、散劑一日分金七錢、頓服劑一包金五錢、錠劑一個金參錢 外用藥 洗滌劑百瓦金貳錢、吸入劑百瓦金參錢、含嗽劑百瓦金貳錢、塗布劑十瓦金六錢 浴劑一劑金拾貳錢、點眼劑十瓦金十錢、點耳劑十瓦金拾錢、膏藥十瓦金五錢、絆瘡膏方二寸金壹錢、褌布五百瓦金貳拾錢、坐藥一個金四錢 注射藥一回金參錢 注腸藥一回分金五錢 但貴價藥ハ此限ニ非ズ

三十年十二月 本校東方の空地へ平屋一棟を新築し、精神病者の收容に充て、これを南病室・北病室に分ち、各病室に看護人溜・浴室・鎮靜室を備付し、中央に應接室・研究室・宿直室を設く。此精神病舎を新病舎と稱した。定員四十名。これは本邦醫學校にて精神病舎を施設したる嚆矢である。

三十二年七月 平井教諭辭任につき、内科第二部を内科第一部に合併して單に内科部と稱し、此内科第二部診察場を神經精神科診察場とし、その後を内科部研究室とす。

三十四年十月 平屋建西洋館二棟を建築し、一棟を十二病室に分ち北一等病室、一棟を二十四室に分ち北二等病室と名づけた。

三十四年四月 診察料等を左の如く改正。

京都府立療病院診察料其他

一、診察料 二ヶ月間金參拾錢

一、往診料 部長 市部一回金五圓 郡部(二里未滿)一回金五圓 以上一里ヲ加フル毎ニ金貳圓ヲ増加ス 醫員 市部一回金貳圓 郡部(二里未滿)一回金貳圓(管外往診料ハ略ス)

一、入院料 普通病室 一等一日金貳圓 二等甲室一日金壹圓五拾錢 乙室一日金壹圓參拾錢 三等一日金八拾錢 四等一日金五拾錢 精神病室 甲室一日金壹圓貳拾錢 乙室一日金七拾錢 傳染病室一日金八拾錢

一、手術料(療用品料ヲ除ク) 一回金五拾錢以上拾圓以內

一、藥價 內用劑(貴價藥ヲ除ク) 一方劑一日分金五錢以上拾五錢以下 外用劑(貴價藥ヲ除ク) 一劑分金五錢以上貳拾五錢以下

下 貴價藥 實費

一、營養品料 實費 一、療用品料 實費

一、診斷書及處方箋料 普通診斷書 一通ニ付金貳拾錢 特別診斷書 一通ニ付金壹圓 處方箋 一通ニ付金壹圓

一、營養品料 實費 一、療用品料 實費

一、診斷書及處方箋料 普通診斷書 一通ニ付金貳拾錢 特別診斷書 一通ニ付金壹圓 處方箋 一通ニ付金壹圓

五 校 長

第一代 萩原三圭 小傳が幸に明治二十七年の中外醫事新報に記載しあり。茲に之を抄録して本學初代校長の譽

れある面影を偲びたい。

名は守教、象堂と號す、三圭は通稱なり、土佐の人、蘭學を細川潤二郎に受け、後ち大阪にて緒方洪庵に學ぶ、慶應の初め幕府醫學校及病院を長崎に創建するや、藩に請うてこの醫學校に入りマンスヘルト、ボードイン等に就て醫學を修む、明治元年八月長藩の士青木周藏と共に長崎を發し、翌年一月佛國巴里に達す、留ること三カ月、去つて獨



三 圭 原 萩

國伯林に赴く、これ實に本邦醫學生が伯林に至るの始なり、翌三年伯林大學に入り醫學を修む、此年池田謙齋は相良元貞、大澤謙二、北尾二郎、長井長義の諸氏を率て伯林に至る、君は青木周藏、佐藤進兩氏と共に既に在り、更めて大學の留學生に命ぜらる、明治六年文部理事官田中不二麿、隨行官長與專齋等伯林に至る、蓋し大學設立に就て教師を聘せんが爲なり、

ホフマン、ミュレル兩氏既に東京に在り、生理解剖の科に聘するにプロフ

エツソル、デーニッツを以てせんとす、デーニッツ容易に應ぜず、長與氏乃ち君に勧めしむ、君デーニッツと共に歸朝す、七月君東京に着し、直に擧げられて文部省出仕となり、大學出勤を命ぜられ、デーニッツを助けて教授のことを務む、七年十二月大學教授に任ぜられしも故ありて其職を免ぜらる、後聘せられて京都に赴き、京都療病院監學事となり、教師澳國人ヨンケルと共に専ら生徒の教育に従事す、府知事君の説を容れて學校を興し、君を擧げて校長に任じ、獨逸の學士シヨイベを聘し教授を委ぬ、君此校を攝理すること七年、明治十五年職を辭して東京に轉ず、舊藩主山内侯君を擢でて侍醫となし、其邸内に居らしむ、十六年侯の令兒病重し、君之を醫して殊功あり、侯大に喜び酬

ゆるに金員及物品を以てせんとす、君之を受けずして曰く、「某已に先公の惠澤を蒙りて學問の一半を了す、侯若し今回の事を以て某に酬んとせば某をして學問の全局を結ばしめよ」と、侯之を許す、よりて翌年八月、再び獨逸國ライプチヒ大學に入り、十九年六月全科業を畢り、ドクトルの學位を得て歸朝す、二十年一月久宮殿下御不豫、君召されて伺候し侍醫局勤務を命ぜられ、翌年五月侍醫に任ぜらる、本務の傍ら小兒科を以て民間救生の業に従事し、選ばれて東京醫會麹町部會の副會長となり、舉げられて醫術開業試験委員となる、君性溫厚君子の風あり、病者に對するや懇切にして、殊に貧者を視ること甚だ厚く、常に曰く、フーフェラントの戒に「一握の黄金も是を貧士双眼の涙に比すれば何ものぞや」とあり、實に千古の格言にして醫たるもの必ず之を服膺せざるべからずと、明治十七年一月肺炎にかゝり、十四月溘焉として館を捐つ、享年五十五、谷中に葬る、名士會するもの數百人



澄 井 半

第二代 半井澄 弘化四年十二月福井に生れ、橋本綱常と共に二秀才と讃えらる、明治六年本校獨逸語通譯兼庶務取締となり、七年九月管醫事となり、後ち管學事を兼務、九年五月院長に昇任、十四年九月校長となり銳意院校の發展に努む、教師シヨイベこれに協力す、猶子淺山等の秀才を招聘し、病院を近代的専門分科に整備した、十九年辭職、市内に東山病院を開設して名聲を揚ぐ、京都醫會（後の京都府醫師會）、獨逸語學校を開設、

臨梅院新設等の功あり

第三代 猶子止戈之助 鳥取縣人 醫學士 明治十五年（一九〇二）五月教諭に任ぜられ、外科部長を擔任、十六年一

月副校長、二十年一月校長となり院長を兼ね、在職十八年専心校運の發展に盡瘁し、二十年、府縣費を醫學校經營に



猪子止戈之助

本校の秀才を數多引用せしも、蓋し一代の名校長であつた



加門桂太郎

充當することを禁ずるの命ありても之に屈せず、學校と病院の擴充に努め、人材を蒐め、専心分科を確立し、醫學校としての地位を大いに確立した、外科手術に優れ、門下生に俊才の輩出多く、その非凡なる力量は關西外科最高峯の名聲を揚ぐ、京都醫學會、本校々友會、その圖書館等を創業した、明治三十年京都帝國醫科大學設立の議起るや、その設立委員となり、三十二年その外科學教授兼附屬醫院長に轉じ本校を去る、去るに當り

第四代 加門桂太郎 岡山縣人 醫學士 明治二十四年教諭に任ぜられ

解剖學を擔任、三十二年七月校長事務取扱、九月校長となるも、在校僅に九カ月、京都醫科大學へ轉ず、その間京都醫科大學の設立に因る校内の動搖に處して功あり

第五代 島村俊一 東京人 醫學士 明治二十年卒業して直に大學院に學び、本邦精神病學の始祖神教授に師事し、教室に助手たること數年、二

十四年十月獨逸國に自費留學し、二十七年十一月歸朝するや、直に本校教諭となり、神經病學、精神病學、法醫學を擔當す、二十八年二月療病院に神經精神病科を獨立せしめて其部長となる、二十二年九月副院長となり、三十三年五

月當時悲運多難の本校に敢て校長となる、三十六年五月病院長をも兼ね、在任中學校と病院の面目を一新せしめて醫學專門學校に完成し、進んで院校全部の改築と改良を竣功し、他日醫科大學に昇格するの基礎を固め、四十三年三月病氣退職せしも、大正五年十二月まで院務顧問と部長と講師を囑託せらる、大正六年十二月校庭に壽像建つ、同十二年三月逝去、東京谷中墓地に葬る。學位論文は、「一、上行性神經炎に因する脊髄炎 二、橋部及橋脚部特に動脈神経核の血液供給に就て 三、所謂片山地方病の病理解剖、腦動脈エンボリー及デヤクソン氏癲癇原因の追加」(肖像後出)

六 教 諭

論



シ ヨ イ ベ

ドクトル・ボット・シヨイベ Schenke, Heinrich Bothe 明治十年(1877)十月來任、獨逸人、當時二十五歳、ラ

イプチッヒ大學に學び殊に熱性病研究の大家ウンデルリッヒに師事、來りて就任するや齋す處の新學説を發表し、治病に熱心、學生に懇篤、本校の眞髓この教師によりて始めて發揚す、講義と診察の餘暇は讀書と研究に精勵、諸般の風土病に着目、特に脚氣を研究し、十四年五月、講堂にて脚氣病の研究を演説した、後年脚氣病論の著あり、在職中本邦人に就て乳糜尿中の住血糸狀虫、或はリグラ縷虫を報告した。このリグラ縷虫發見は世界的にも最初の人であつた、また剖見に際し、十二指腸虫體の存在を本邦人に於て最初に發見した人でもある、また盛

んに病理解剖を行つた、長所は内科にして外科之に次ぐ、明治十四年十二月解雇され歸獨し、のち數年にして學位を得、ハイデルベルヒ皇室附屬病院長となる（十三年十一月頃、月給銀貨五百圓）

萩原三圭 八年六月——十四年九月 校長

半井澄 六年十二月——十九年六月 校長 内科部長 京都市東山病院長

狹子止戈之助 醫學士 十五年五月——三十二年七月 校長 外科部長 三十二年十二月二十二日醫學博士、教諭

は風格識見の高い一言一句苟せもせない底の人、内臓外科に秀でその指先に眼があると讃えられた、教室ではいつもメモなしに朗々と講義し、「ソノコノ」と云う詞を交ぜる癖があつた

齋藤仙也 醫學士 十五年五月——二十一年十一月 内科部長 京都市にて開業、京都府醫師會長として令名あり

上田勝行 十五年九月——二十一年十二月 物理・化學・ドイツ語 藥局長 京都醫學豫備校校長

新宮涼亭 醫學士 十四年五月——十六年十月 内科部長 京都市に開業



淺山郁次郎

淺山郁次郎 醫學士 十七年四月——三十二年七月 眼科部長 堅實な

る學風と謹直なる人格は今もその教室に莊重なる傳統を與えている、講義は紙片をもつだけで明快、京大教授となる、眼病理學に造詣深く、表層點狀角膜潰瘍・交感性眼炎・眼窩淋巴腫・硝子體出血等に就ての知見と、臨床的に中心性網膜炎の存在に就て等の發表がある、三十六年三月十七日醫學博士

武部隆太郎 醫學士 十七年九月——二十年三月 婦人科產科部長

星野元彦 本校出身 十九年十月——二十八年七月 病理解剖學・診斷學 京都市内開業

足立健三郎 醫學士 二十年六月——二十七年十一月 婦人科產科部長 京都市足立病院院長

喜多川義比 二十一年四月——二十八年十月 化學

佐藤廉 醫學士 二十一年十一月——二十四年二月 内科部長

田村克己 十五年九月——二十三年十二月死亡 解剖學 就任時療病院教授副(八年九月) 月給三十圓、就任前

東京醫學校教師

加門桂太郎 醫學士 二十四年二月——三十三年五月 解剖學・組織學 校長 四十年四月二十三日醫學博士、其

講義は綿密、實習を巧妙に示教、殊に腦脊髓神經系統に興味あり、明細なる説明圖譜を黑板に自ら書き、講義前豫め生徒の模寫に便した、京大教授となる



笠原光興

笠原光興 醫學士 二十四年四月——三十二年八月 内科部長 二十七

年二月自費獨逸國留學 二十九年四月歸學 内科第一部長、貴公子然たる

風彩の人、講義は訥辯で右手を舉げて振りつゝ話した、診断は神祕的確であると讃えらる、京大教授に轉じ内科學第一講座を創始し、終始一貫本邦臨床内科學の體系整備に努力し、特に肝臟硬變症と血液病に就て幾多の斬新なる見解を発表す、三十四年六月二十九日醫學博士

栗生光謙 十五年十二月——二十四年九月 物理學・生理學



宮入 慶之助

宮入慶之助 醫學士 二十四年九月——二十七年五月 生理學・衛生學
三十八年一月十四日總長推薦醫學博士、福岡醫科大學教授に轉ず、大正二年日本住血吸虫の中間宿主たる宮入員を發見し、その體內に育成したるセルカリヤが、貝を辭し水中に遊泳し、宿主を求めて、それが人の皮膚に侵入感染することを確認し、その幼虫が常住地たる肝靜脈に移行する經過を本邦人につきて實驗的に探究したる人



平井 毓太郎

平井毓太郎 醫學士 二十七年三月——三十二年六月 内科・小兒科部長 二十九年四月 第二内科部長、三十七年四月二十九日醫學博士、儿張面にして清廉なる醫人、京大教授となる、本學の三浦、齋藤兩教授その門より出づ、「乳兒に見る所謂腦膜炎」の本態を、含鉛化粧品に起因する慢性鉛中毒であると闡明し、その豫防と治療方針を樹立す、昭和七年五月學士院賞を授與さる

伊藤正信 二十七年三月——二十八年十二月 物理學

富永兼棠 醫學士 二十七年五月——三十年九月 生理學・衛生學

島村俊一 醫學士 二十七年十二月——四十三年三月 神經精神科部長 精神病學・神經病學・法醫學 校長 三

十九年八月八日醫學博士



高山尚平

高山尚平 醫學士 二十八年一月——三十六年五月 產婦人科部長 三十三年九月療病院院長、なつき易い先生、福岡大學に轉じ、間もなく京大に歸り產婦人科第二代主任となり、高山式子宮摘廣汎性剔除術の妙技にて有名、婦人科開腹手術の際一般に行われる骨盤高位と、婦人科外來療法の一つである壓迫療法、熱氣療法の唱導者である、三十九年九月二十九日總長推薦醫學博士

秋元隆次郎 醫學士 三十六年五月——大正三年七月 產婦人科部長 大正元年十月私費獨逸國留學 同二年十月歸朝

古屋恒次郎 藥學士 二十八年十月——三十年十月 化學 藥局長 第一高等學校教授に轉出

江馬章太郎 三十年一月——大正三年七月 皮膚科・梅毒科・耳鼻咽喉科部長

平山松次 藥學士 三十一年一月——三十三年六月 化學 藥局長

角田 隆 本校出身 三十四年四月——昭和十四年八月 本校病理學教室の始祖 四十一年七月獨逸國公費留學

大正三年十一月學生監 學長 名譽教授 四十四年十二月九日醫學博士 教授半生の業績は「中樞及末梢神經組織の形態的研究」である

融禮次郎 本校出身 三十一年十一月——三十五年四月 眼科部長 京都市に開業

松山爲雄 三十二年七月——三十五年五月 外科部長 京都市にて松山病院を開く

淺木直之助 本校出身 三十二年九月——三十四年三月 内科部長 藥物學 京都市に内科開業

町田 伸 三十三年五月——四十二年九月 化學 藥局長

工藤外三郎 醫學士 三十三年九月——大正六年七月 内科第二部長 三十九年八月獨逸國留學 四十一年一月歸

朝 四十二年四月二日醫學博士 大正三年十月校長

赤座壽恵吉 三十四年一月——大正六年七月 解剖學・組織學

朝井元章 本校出身 三十四年四月——三十五年七月 神經病學・電氣治療學 京都市に開業

永井德壽 醫學士 三十四年五月——四十四年一月 生理學 前仙臺醫學校教授

望月惇一 醫學士 三十五年四月——大正三年十月 内科第一部長 四十三年四月三十日醫學博士 四十三年三月

校長 大正二年四月歐州各國へ出張 同三年二月歸朝 同十月休職

伊藤元春 醫學士 三十五年四月——大正三年七月 眼科部長 四十三年四月獨逸國に留學 大正元年十月歸朝

池田廉一郎 醫學士 三十五年七月——四十四年五月 外科部長 三十七年七月獨逸國留學 四十年一月歸朝 四

十年七月二十四日醫學博士、新潟醫專教授に轉じ後にその校長

七 團

團體

一、京都府醫學學校友會

醫學校時代の當初に「振元會」と云う文化團體あり。伊良子暉造、繁定壯平等が主宰し、「振元會雜誌」を出していた。運動團體として「靜虎團」があつた。別に「敷島俱樂部」と呼ぶ運動團體もあつた。校友會の成立は、これらの團體が大同團結したのである。

校友會は明治二十九年十二月創立し、規則を議決した。目的は相互の知識を交換し、體力を練り德義を養ひ、校風を振起し、同窓の和親を謀るにありと云うのである。院校職員を名譽會員とし、卒業生を特別會員とし、生徒を通常

明治三十年一月二十二日發兌

校友會雜誌

第壹頁

京都府醫學校校友會

校友會雜誌創刊號

谷委員事務報告・田村委員會計報告・繁定委員雜誌編集論・安藤精軒翁維新前後の教育論・猪子會長挨拶・講師山本章太郎本草學考・理學博士村岡範爲馳教授レントゲン放線説明及實驗・餘興にブラック氏催眠術の醫學的應用論と實驗等があつた。

雜誌は一年四回發刊と決め、翌三十年一月第一號を發行した。今その初刊誌内容を閲するに、猪子校長は「校友會創立を祝す」と題し、校風の振起を圖り内外一致の結束を希ひ、嚆月生は「雜誌の發行を祝す」にて運動部・學術部

の二部を分置し元氣の養成と風紀の振肅を計れと主張し、編輯主任繁定壯平は「雜誌發行の趣意」を強調し、校計者山口信雄（後に大朝記者）は「校友會は醫學校の精神なり、醫學校の精神は集めて校友會にあり」と論じ、編輯員土屋榮吉と大塚長孝（後の醫博、文理科大學教授）は「所謂校紀の振肅」を説破し、尾見薫（後の滿鐵大連病院院長）は「英傑論」を戴せ、油谷安次郎（濱寺に開業）は「道義と得喪」と題してキリスト主義を述べ、加門教諭は科學欄にて「フォルモール及其固定貯藏作用」を記載し、富永兼榮教諭は四頁に互る新體詩「鐘の歌」を譯載している。

明治三十年琵琶湖に短艇一個を所有し「伏波號」と命名す。同年五月三日第一回水上大運動會を琵琶湖三保ヶ崎に催す。同七月十八日全國聯合短艇大競漕會に加盟し、本校より一艇を出漕せしめ、長崎高等學校醫學部及大阪醫學校と其技を争い大捷す。三十一年一月運動部にベースボール技を加う。同九月毎年四年級修學旅行の件を決す。同十月二十二日京都醫學圖書館設置の儀を決す。三十二年五月運動部にローンテニス技を追加す。三十四年二月三日第一回柔道部大會を開く。三十六年六月本會を京都府立醫學專門學校校友會と改稱す。同四十一年十一月學校創立三十年紀念號として本校沿革史を發行す。今の本學々友會は本會の後身なり。

二、佛教青年會

主として本派本願寺の支援を受け毎月一回講話會を、毎年一回公開總會を開く。講話會は各本山の名僧を招き教室にて催した。就中本願寺勸學赤松連城師が敬慕された。公開總會は校外にて開催し、三高など他校同名の會と連合もした。當時の記念撮影を見ると、四十八人の生徒と淺木、朝井、谷の三助教諭と赤松連城、名和淵海兩師等が列んでゐる。

三、基督教青年會

明治二十五年一月創立、二月六日開會式、聖書講義、獨逸語の聖書研究、名士講演等を事業とし、講演會は教室にて開いた。昭和二十七年は恰もその六十周年に相當する。

四、日蓮上人研究會

明治三十四年四月生る。校友金子源壽、原志免太郎等の發起であつて、「妙宗」主筆田中智學と高山樗牛の鼓吹に奮起し、日蓮上人研究とその教義篤信と國民眞骨髓の修養を目的とした。

八 京 都 醫 學 會

本校が創設されてより、十年餘りを経たる明治十九年（1886）一月、療病院内に京都醫學會が誕生した。その會員は主に校と院の醫師であつて、「各自の經驗を話し相互に啓發し、智識の交換をはかり、外國雜誌を抄讀して以て醫學の進歩に資すること」を目的とした。毎月一回集會していたが、回を重ねるに従つて市内開業の人々も參加した。

二十一年に至り「京都醫學會雜誌」を創刊し、爾來月々誌上にて學術を論じ、内外醫學を紹介し、醫學校療病院內會員の動靜を報告した。此雜誌は廣く會員間に親まれ、京都の醫學と密接なつながりをもった。會員の總數は百五名、二十一年一月第二回總會を開いたが、會頭猪子止戈之助開會の辭を述ぶ。集るもの七十三名の多きに及んだ。發會當時の會長は半井澄なりしも、此のときの役員は會頭猪子止戈之助、副會長淺山郁次郎、理事上田勝行、喜多川義比、桐村義堯、星野元彦、中田彦三郎、足立慶三郎、南部達雄、安野郁太郎諸氏であつた。會費を在京會員二十錢、遠隔

會員十五錢、醫學生十錢に區別し、例會はのち月二回、十日・二十五日とし、一回は晝間、一回は夜間とした。總會は春季に開き、總會にて學術演説、事務報告、役員選舉を行い、醫事衛生關係の施設を參觀し、醫學書画・器械・標本を陳列した。宿題を設けて討論することもあった。二十二年に三宅秀、二十三年に三浦守治、二十四年には北里柴三郎等諸博士の臨時特別講演會を開いたようである。三十二年京都醫科大學設立せらるるや、本校と唇齒輔車の關係にあった本會は、三十四年五月以來休會狀態となり、雜誌も同七月以降休刊となった。三十六年三月十八日、本校化學教室にて本會の最終評議員會を開き即日本會解散を決議し、殘務處理委員を選出した。殘務委員は本會雜誌總目錄及び索引を作製し、殘務報告と共に之を一冊の始末報告書として會員に配布し、殘金は新に發會せる京都醫學會の基金に寄付し、書籍雜誌類は校内の京都醫學圖書館に寄贈した。始末報告書の巻頭に「天の時利あらず、人の和漸く冷かならんとす、乃ち任意解散をなし、將に大に勃興せんとするものために全力を盡すに決す、于時明治三十六年三月なり矣」と聲明している。殘務整理に主として盡力したるは朝井元章である。

九 本校と關係ありし醫學雜誌

一、療病院雜誌 明治十二年三月第一號を發兌したる本誌は、十四年六月第二十七號にて廢刊す。

この療病院雜誌の十四年上半年賣捌高（警保局長田邊良顯宛京都府北垣知事報告、京都府療病院半井院長調べ）は總計百二十三部、此代價金七圓三十八錢であつて、發賣先は外國無し、内國東京五、大阪五、徳島一〇、兵庫五、長崎八、千葉七、茨城五、三重五、山梨五、滋賀一〇、長野五、福島三、宮城五、岩手五、青森五、山形五、石川二、福井五、島根五、岡山五、廣島五、愛媛三、和歌山五と汎く他府縣に涉つてゐた。

二、醫事集談（京都醫事會社） 明治十二年三月第一號を發兌したる本誌は、十三年九月第二十號にて廢刊す。

三、京都醫事雜誌 明治十八年四月第一號を發刊したる本誌は、二十年五月第二十六號にて廢刊となる。

明治廿一年一月二十九日

井 野 元 彦

四、京都醫學會雜誌 明治二十一年（1896）一月第一號發行、同三

京都醫學會雜誌

京都醫學會雜誌創刊號

井 野 元 彦
京都醫學會

十四年七月第一六二號にて廢刊す。その第一號には「循環蛋白尿」齋藤仙也、「產科的及婦人科的按摩ノ應用」星野元彦、「防腐品微種檢索附防腐品優劣一班」桐村義堯等の論文、また終刊號には「二三局處麻酔（附自家考案緊縛法）法ニ就テ」ドクトル淺原慎次郎（京大）、

「圓形禿髮ニ就テ」江馬章太郎（府醫）の論述が載っている。

五、京都府立醫學學校校友會雜誌 明治三十年一月第一號を發刊し、大正十五年十二月第一〇三號に至っている。

十 著 書

この時代に於ける本校關係者の著書は甚だ少ない。

明治十七年出身の高田畊安が「爾氏解剖圖付解説」、二十一年、栗生光謙が「胎生汎論」「動物學」を發行したる記録あり。

十七年七月、前教師獨逸人シヨイベ（慕都胥乙邊）著「脚氣病論」を江阪秀三郎・武部隆太郎・半井澄の三名が譯述し、療病院藏版として發行した。二十二年六月十五日、江阪秀三郎が歇爾蔓愛邨保斯篤原撰の「微毒全書」を纂述

し、香山晋次郎校閲して市内二條通柳馬場若林書店より發行している。

二十七年、伊藤元春に「視器中樞診斷一覽」の著あり。

三十年九月、生徒板谷忠太郎・安福精一郎・土屋榮吉が發起人となつて「京都府立療病院調劑備考」第二版を編纂し、これに數種の必要なる付録を追加し、各部長の檢閲を経て、豫約印刷して校内希望者に頒布した。其緒言に曰く「吾人は京都醫學學校生徒なり、故に常に此意を體して、學業に實地に、學校若しくは病院に於て研究に従ひ、以て目的を達するに努力し、苟くも吾人の本分に戻らざる限りは各々權能に應じ、一切の手段を盡して、遺漏なからんことを期せざる可らず、就中吾人將來に最も必要なる處方の如きは、須く當療病院の方鑑を基礎とするの至當なるを信ず、而れども此處方たるや複雑繁多、悉くに之れを記憶に存する能はざるのみならず、其性狀分量は直に人の生命に關するを以て、深く謹慎詳密分毫の誤謬なきを期せざるべからず、故に世の名家大醫各其方例を記錄して備考に供す、此れ生等共同本院現行の方鑑を纂集せんと欲する所以なり」云々。

三十一年五月、加門桂太郎編纂「神經系統中樞器圖譜」を林貞一が製圖發行している。

三十四年九月、伊藤房藏は「人體局處解剖圖譜上肢及下肢」を著作編纂し、醫科大學の加門助教がこれを校閲している。其資料は本校所藏のものである。又三十五年、角田隆は「病理組織學」を著し、校友會より發行した。

十一 醫學圖書館

明治二十三年（1890）十一月本校を母體として成立の京都醫學會は、療病院内に書籍室を設け、書籍雜誌を備付



醫學圖書館印

け、會員の縦覧に供した。これ本校圖書館の端緒である。三十一年十一月二十二日、創立間もなき本校々友會は、その一事業として京都醫學圖書館を設置することに決定し、同會雜誌第十四號に設立主旨を發表した。京都醫學會もとよりこれに協力した。在校生徒父兄、學校關係者と醫事衛生關係の新聞雜誌社等に資金と圖書の寄贈を求めたが、それが續々と集まり、貴重な醫書の保管依託もあつた。同三月醫學圖書館規則を定めた。準備委員は生徒の板谷丈夫、武田秀夫、土屋榮吉、町田貞造、加藤喜十郎、菊山嘯一郎、桐村銀吉、黒田涼造、奥野平三郎、小西明、小川爲四郎、平田貞太郎がこれに當り、當初の役員は監督猪子止戈之助、加門桂太郎、商議員平井毓太郎、江馬章太郎、朝井元章、久富猪一郎、香山晋二郎、田中秀三、三宅宗淳である。集まつた寄付金千餘圓、寄贈圖書二千五百餘冊に達した。三十二年五月一日解剖學教室西隣室をこれに當て、京都府醫學學校校友會醫學圖書館と名乗つて開館した。開館後も續々と圖書金子の寄贈があり、京都に於ける唯一の醫學圖書館として、生徒教職員のみならず在京醫家にも利用された。本館の維持費、新書籍雜誌購入、什器充實、書記手當等の經費は、もとより校友會が擔當した。三十三年十一月校内生徒溜所に新聞閱覽所を設けた。三十四年教諭朝井元章が校友會圖書部長に、家原毅男（三年生）が理事に、小西明（四年生）、後藤與式（二年生）、江口徳三郎（一年生）が委員となった。三十五年四月永井教諭が圖書部長となり、同時に有給書記を囑託した。開館五年後の頃は殆ど校内だけに利用されていた。三十六年三月京都醫學會が解散したので、同會所有の書籍雜誌全部と、殘金一部の寄付を受けた。三十六年六月本校が京都府醫學專門學校と改まりし頃、本館を元療病院事務所跡に移轉し設備を整えた。三十七年五月伊藤元春教授が圖書部長となった。斯く

して校友會の創設したる本館は、大正十五年八月十日本學の直營に移管され、獨立して本學中央圖書館となり、各教室にありし大學圖書を全部監理することゝなつた。爾來毎年發達し、今や本邦優秀の醫科大學圖書館と讃わるゝに至つた。初代の中央圖書館長は梅原教授である。

因に現書記赤星軍次郎は、京大法學部勤続十年間の經驗を買われて、本學中央圖書館開館前の同年五月本館に就任し、爾來今に精勤の本館功勞者である。氏は「開館當初は七先生の記念圖書を一間の書棚に具え、専ら學生の閱覽に供える程度にすぎざりしが、今は新舊七萬餘卷を藏する程に擴充した」と述懐している。

十二 卒業式と卒業生

京都府平民

江坂秀三郎

二十一年八月

普通醫學卒業

候事

明治三十七年七月



書證業の卒業の初

明治十三年京都醫學校新築移轉式舉行の節、生徒十九名に卒業證書を授與したが、この卒業生は、舊栗田口療病院に於て醫學を教授したる、それ以來の生徒である。その卒業證書は、大奉書半切の大ききで、本文に「普通醫學卒業候事 京都療病院醫學校」と認めてあり、卒業者は桂彦馬・中島俊造・吉村英徴・江坂秀三郎・毛利文啓・矢内原謙一・鷹取常任・神戸有哉・生駒安貞・大矢督・藤木經輝・渡邊格太郎・市川賢顯・前田榮・瀧澤耕伯・中島武雄・山口滿慶・井上幸一・高儀文伯である。

明治十七年三月本校第一回卒業式を行い、高田畊安以下十二名に卒業證書を授

與した。この卒業生が、十二年八月制定の校則によって入學せしめたる生徒である。試みに醫學學校時代の卒業式回数、年次、年間式數、卒業者數を表示してみると、



本校最初の卒業者

回数	曆年	月	人數	回数	曆年	月	人數
第一回	明治一七	三	一二	第一四回	明治二四	九	三四
第二回	一八	三	七	第一五回	二五	九	四四
第三回	一九	二	九	第一六回	二六	九	三五
第四回	一九	六	一四	第一七回	二七	九	三九
第五回	一九	一〇	一六	第一八回	二八	九	四四
第六回	二〇	二	一二	第一九回	二九	一〇	四七
第七回	二〇	九	九	第二〇回	三〇	九	六七
第八回	二一	四	一二	第二一回	三一	六	五八
第九回	二一	九	二八	第二二回	三二	六	五九
第一〇回	二二	一	六	第二三回	三三	六	七六
第一一回	二二	六	二九	第二四回	三四	六	七二
第一二回	二三	六	三八	第二五回	三五	六	四八
第一三回	二三	二	二八				

本表を見るに、明治二十三年迄は年間の式數二回、時に三回のこともあり、舉式月も不定、人數も著しく不等なり

しが、二十四年より、年一回九月に、二十一年よりは六月に一定し、人数も三十五名以上七十六名以下となっている。此卒業生總數八三三名、その出身地の最多なるはもとより京都の二三〇名、次は和歌山六七、廣島六〇、滋賀四六、三重四四、兵庫四〇、山口三五、愛媛三十、大分二九、岐阜・福岡各二五、島根・新潟各二四、岡山二三、大阪一七、鳥取、奈良各一五、愛知一三、其他、福井・熊本各八、鹿児島七、高知六、長崎・長野各五、東京・静岡・富山・香川・栃木各四、徳島・石川各三、北海道・青森・埼玉・神奈川・福島・山梨・山形・群馬・千葉・宮城・佐賀等各一となる。八三三名が卒業後の業務地と此出身地とに若干の異動ありとしても、これをもつて凡そ當時本校卒業生の國內分布状態が窺知される。三十五年の調査によれば、當時、本邦醫師三萬四千五百有餘人、其内一萬五千人は支那醫方、若しくは舊時の蘭醫方修得者であつて、約一萬人は帝國大學、醫學專門學校及外國醫學校卒業生、文部省醫師開業試験及第者である。一萬人の内、學校教育を受けたる者が六千人（東京帝大醫科大學、甲種醫學校、外國醫學校卒業生）あるが、この六千人中に本校出身者約八四〇人を含むわけで、この八四〇人が京都府のみならず、廣く他府縣に分布して本邦の醫事衛生に貢獻したる其功績は大きい。

前記この時代の卒業生八三三名は、本學創立八十年記念の昭和廿七年十一月現在、生存者一〇五名、死亡六七八名、不明者五〇名となつてゐる。

明治三十二年頃の卒業試験を回顧するに、基礎科は加門教諭の解剖學・組織學・系統解剖學、囑託教員栗生光謙の生理學・衛生學、臨床科は島村教諭の内科學（神經科・精神科）・法醫學、猪子教諭の外科學、融教諭の眼科學、淺山教諭の眼科學、淺木助教諭の藥物學、笠原教諭の内科學、高山教諭の産科學・婦人科學、平井教諭の内科學（小兒

科學を含む)、江馬教諭の皮膚科學をそれぞれ學說と實地に分けて施行し、内科は三教諭の内一つだけ抽籤によつて受け、學說實地合せて前後二カ月程かかつて終了し、六月に嚴かな卒業式を行い、全部同時に集立ちした。式後謝恩會を催し、そこで最後の氣勢をあげた。卒業證の文面は「右者京都府醫學校正規ノ學科ヲ修メ卒業試驗ヲ卒ヘタリ 仍テ之ヲ證ス」とあつて、その後に前記各教諭の名を列記し、名の上に擔任學科目を書き、内科、外科、眼科、産科婦人科はその下に論理及實驗と記し、最後は位階勳等の肩書ある校長名である。證書は全部正しい墨書の肉筆であつた。

十三 解剖體祭

本校は明治十七年七月、京極に在る淨土宗誓願寺に於て第一回解剖體大法會を施行し、爾來同寺にて二十一年三月第二回、二十二年九月第三回を施行した。この法會はその後中絶したるも、明治三十六年十月十日、本派本願寺にて第四回解剖體大法會を復興した。この時の解剖體靈位は六百柱である。明治二十四年六體、二十五年十二體、二十六年十三體、二十七年十五體、二十八年二十九體、二十九年三十六體と年々増加し、その多くは院内學用患者屍であるが、その他に京都の監獄内受刑者屍が提供された。明治十七年五月七日内務卿山縣有朋より(乾衛第二〇六號)京都府に對し、「病死體解剖の義は明治九年七月二十八日付をもつて相達候趣も有之候處自今本人の情願或は遺族の承諾有之に於ては患部全體に不拘剖觀不苦候 此旨相達候事」の公文がある。

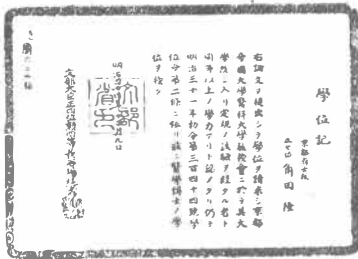
(附記) 本校は明治四十年三月、洛東大日山京都市所有地共同墓地二百六十坪を借入れ、本校附屬墓地としてここ

に「學用患者の墓」を建設、この墓地では毎年五月十四日、大日山麓淨土宗安養寺の住職を導師とし春季追悼供養墓前祭を施行している。昭和十三年六月一日此墓碑銘を「俱會一處」と改刻した。その墓前には教授島田吉三郎が石燈籠一對を寄進している。同時に「研究動物諸靈供養塔」をも建て、塔の前には教授梅原信正が一對の石燈籠を寄進している。このような墓前祭とは別に、明治三十六年以來、毎年十月一日日本派本願寺に於て秋季解剖體大法要が嚴修されてゐる。それは一部は大殿にての法要であり、一部は鴻の間にての剖見體靈位過去帳の祭典である。參列者はいつも堂に満ち、祭典には學長以下各代表の燒香、當該教授の弔辭、高僧の法話がある。

因に本學々友會書記住岡熊雄は本校教務課の永年勤続者であつて、其間解剖體事務も取扱つた人であり、また大日山市營墓地の管理者であり、その管理所が偶々本校墓地の近くにあるので朝夕この靈所を守護してくれてゐる。

十四 學位 受領者

學位記



京都府醫學校時代本校内關係者にして學位を獲得したのは、元教諭にては明治三十二年(1899)十二月猪子止戈之助(東大總長推薦)、同三十四年六月笠原光興(東大總長推薦)、同三十六年三月淺山郁次郎(東大論文提出)、同三十七年四月平井毓太郎(京大總長推薦)、同四十年四月加門桂太郎(東大論文提出)あり。現教諭にては、同三十九年八月島村俊一が論文を東大に提出して受領したのが第一である。校友にては尾見薫を筆頭とし、湯川玄洋、藤谷功彦、角田隆等が相ついで京大より受領した。

十五 醫學豫備校

明治九年五月以來京都府中學校内に在りし醫學豫科校を、明治十二年四月療病院内に移し、京都府醫學校の管理に屬せしめたが、同十四年七月分離して獨立せしめた。但し、それが本校の豫備校である關係は事實上に變化はない。同十七、八年頃、半井澄、山田文友、安藤精軒等の有志が河原町御池東南角に私立醫學豫備校を設立した。教師の主なるものは原口隆造、上田勝行、栗生光謙、藤井良吉等、生徒の多くは市内醫家の調劑生、午後一時の開校、生徒の帽章はDSの組合せである。二十七、八年頃は二學級をもつて編成し、卒業生は中學校卒業程度と認定され、これが京都府醫學校への主なる進學コースであつた。しかし入學試験は受けた。三十一年醫學校へ入りし合格者は豫備校卒業三七、其他三六、計七三名である。

十六 校

則

この時代に於て、京都府知事が本校に關して發した府令の類を探し求めたが、僅に古文書中より、明治十四年、十七年、三十年の本校々則を得たのみである。この三者の變改は之れを既に前記第三章校史中に記録したる二十七年七月及び三十五年三月改正校則と對照すれば、本校の發達を指示するものとして興味あり、重要な資料なるを以て特に採録せんとす。

(一) 教授法

京都府立醫科大學八十年史

二二二

一、受業時間ハ毎日五時間ヲ過キス

一、教授ノ方法ハ引用書目ニ舉クル所ノ諸書ヲ參考採摘シ邦語ヲ以テ講述シ生徒ヲシテ之ヲ筆記セシム 且ツ器械制品ヲ使用シ
實物ヲ指示ス

學 期

一、就學ノ期限ヲ五ヶ年ト定メ之ヲ十學期ニ分チ前一ヶ年（即二學期）ヲ豫科學期トシ後四ヶ年（即八學期）トス

試 驗

一、試驗ハ大試驗學期試驗ノ二種トシ大試驗ハ全學期中二三回之ヲ行ヒ學期試驗ハ每學期ニ之レヲ行フモノトス
一、試驗ハ口述及筆記ノ二項トス

學科課程

第一學期 醫用語學（和漢獨羅）、數學（幾何及代數學）、博物學（動物及植物學）

第二學期 語學前期ノ續、數學（幾何學、代數學）、博物學（礦屬部）

以上學科試驗

第三學期 物理學（總論、重學、響學、熱學、光學）、無機化學（總論、非金屬及金屬部）

有機化學（脂肪體、尿酸類、芳香體）、解剖學（骨部、韌帶、筋論）

第四學期 物理學（磁石、電氣及氣象學）、有機化學（植物鹽基類、蛋白質）、解剖學（內臟）、組織學（總論）

第五學期 解剖學（脉管、神經及五官論、解剖術）、生理學（總論）、生理及組織各論（全科四分ノ三）

第六學期 生理學及組織各論（全科四分ノ一）

以上學科試驗

第七學期 内外病理通論、診斷學

第八學期 内外病理各論及治療學（附臨床講義、實際演習）

第九學期 全上

第十學期 全上 眼科、藥劑學

卒業試驗

引用書目

ロイニス氏博物書

ドルネル氏及ミユルレル氏物理學書

ロスコー氏及ビンネル氏化學書

ヒルトル、ホフマン、ヘンレー氏解剖學書

フラキ氏組織學書及同氏顯微鏡學書

ヘルマン氏、ウンケ氏、ウインド氏生理學書

右之通りニテ來ル九月一日ヨリ教授候條此旨報告ス

但シ本教則ハ文部省へ經同ノ上更ニ揭示ス

明治十四年八月廿五日

醫學校

(二) 甲第十二號 醫學校通則別紙ノ通り文部省ヨリ布達相成候條此旨布達候事

醫學校時代

ワグネル氏病理通論、サムエル氏同

クーマン氏診斷學書

ニーマイエル氏病理各論及治療書、クンネエ氏同

ビルロート氏外科書、キヨーニツヒ氏同各論

シエルスケ氏眼科書

ビンツ氏藥劑書、ノートナーゲル氏同

明治十七年二月二十八日

京都府知事北垣國道代理 京都府大書記宮尾越蕃輔

醫學學校通則

第一章 總則 第一條 醫學學校ハ此通則ニ遵ヒ醫學ヲ教授スル所トス 第二條 醫學學校ハ之ヲ分テ甲乙二種トス、甲種ハ尋常ノ醫學科ヲ教授シ以テ醫師ノ具成ヲ圖リ上款ニ遵ヒ之ヲ設置スルモノトス、乙種ハ簡易ノ醫學科ヲ教授シ以テ醫師ノ速成ヲ圖ルトキ若クハ甲種ヲ設置スル能ハサルトキニ於テ下款ニ遵ヒ之ヲ設置スルモノトス 第三條 醫學學校ニ於テハ臨床實驗ノ用ニ供スルニ病院ノ準備アルヲ要ス

上款 第二章 學科目 第四條 甲種醫學學校ノ學科ハ少クモ左ニ掲クル諸目トス 物理學、化學、動物學、植物學、解剖學、組織學、病理學、藥物學、内科、眼科、産科、内科臨床講義、外科臨床講義、衛生學、裁判醫學

第三章 修業年限日數及時數 第五條 甲種醫學學校ノ修業年限ハ四ケ年以上トス 第六條 甲種醫學學校ノ授業日數ハ少クモ毎年三拾二週ヲ下ルヘカラス 第七條 甲種醫學學校ノ授業時間ハ一週貳拾四時ヲ以テ度トス

第四章 入學生徒ノ資格 第八條 甲種醫學學校ニ入學スル生徒ハ品行端正體質強健ニシテ年齡十八年以下トス 第九條 甲種醫學學校ニ入學スル生徒ハ初等中學科卒業以上ノ學力ヲ有スル者若クハ少クモ左ニ掲クル科目ニ就テ初等中學科以上ノ學力ヲ有スルモノタルヘシ 和漢文、算術、代數、幾何、物理學、化學、動物學、植物學

第五章 教員ノ資格員數 第十條 甲種醫學學校教員中少クモ三名ハ東京大學ニ於テ醫學士ノ學位ヲ得タル者ヲ以テ之ニ充テ主トシテ重要ノ學科ヲ分擔セシム 但シ他ニ相應ノ學力ヲ有スル者アルトキハ文部卿ノ認可ヲ經テ本文醫學士ニ代フルコトヲ得

下款 第六章 學科目 第十一條 乙種醫學學校ノ學科ハ左ニ掲クル諸目トス 物理學、化學、解剖學、生理學、藥物學、内科、外科、眼科、産科、内科臨床講義、外科臨床講義

第七章 修業年限日數及時數 第十二條 乙種醫學學校ノ修業年限ハ三ケ年トス 但此年限ヲ一年以內増加スルコトアルヘシ 第十三

條 乙種醫學校ノ授業日數及授業時間ハ第六條及第七條ニ準不

第八章 入學生徒ノ資格 第十四條 乙種醫學校ニ入學スル生徒ハ其品行體質年齡總テ第八條ニ準ス 第十五條 乙種醫學校ニ入學スル生徒ハ左ニ掲クル科目ニ就キ概ネ初等中學科ノ學力ヲ有スルモノタルヘシ 和漢文、算術、物理學、但此他第九條ニ掲クル諸科目中一科若クハ數科ニ就キ本文ノ學力ヲ要スルコトアルヘシ

第九章 教員ノ資格員數 第十九條 乙種醫學校ノ教員中少クモ一名ハ總テ第十條ニ準スヘキモノトス

(三) 京都府醫學校規則 (三十年九月、摘要)

第一章 總則 第一條 本校ハ醫術ニ關スル專門學科ヲ教授スル所トス 第二條 本校ノ修業年限ハ四ヶ年トス 其學科課程左ノ如シ

第一年級 獨逸語學 一年間每週六時、醫用動物學 前期每週三時、醫用植物學 後期每週二時、物理學 一年間每週六時、化學 一年間每週六時、解剖學 一年間每週九時、解剖學實習 後期、體操 一年間每週四時

第二年級 獨逸語學 隨意、化學實習 前期每週三時、解剖學實習 前期、組織學 一年間每週六時、組織學實習 前期、生理學 前期每週十二時、後期每週三時、生理學實習 後期、病理總論及治療總論 後期每週三時、病理解剖學 後期每週六時、藥物學及處方學 後期每週六時、調劑實習 後期、外科通論 後期每週六時、體操 一年間每週四時

第三年級 獨逸語學 隨意、電氣療法 每週一時、局處解剖學後期每週六時、內科各論 一年間每週四時、診斷學 前期每週三時、診斷學實習 後期、內科入院患者臨床講義 一年間、外科各論 一年間每週三時、綱帶學實習 前期、皮膚病及梅毒病論 前期、婦人科學 一年間每週三時、婦人科入院患者臨床講義 一年間、神經病學 一年間每週二時、體操 一年間每週一時

第四年級 獨逸語學 隨意、小兒科學 前期每週三時、內科各論 前期每週四時、顯微鏡的及化學的診斷實習 前期、內科外來患

者及入院患者臨床講義 一年間、外科各論 前期每週三時、外科外來患者及入院患者臨床講義 一年間、耳科外來患者及入院患者

臨床講義 一年間、皮膚科外來及入院患者臨床講義 一年間、手術演習 後期、眼科入院患者及外來患者臨床講義 一年間、產科

學 一年間每週三時、產科外來患者及入院患者臨床講義 一年間、神經病學 前期每週一時、神經病科外來及入院患者臨床講義

後期、精神病學 前期每週三時、精神病科入院患者臨床講義 前後期、微菌學及實習 後期、衛生學 後期每週三時、法醫學 後

期每週三時、產科模型實習 後期、體操 一年間每週一時

臨床講義ハ府立療病院ニ於テス

第二章 學年學期休業 第四條 學年ヲ分チテ左ノ二學期トス、前學期 四月一日ヨリ十月三十一日ニ至ル、後學期 十一月一日ヨ

リ翌年三月三十一日ニ至ル

第三章 入學退學 第七條 入學ヲ許可スヘキモノハ身體強健品行方正年齡滿十七年以上ニシテ尋常中學校卒業ノモノ若クハ之レト

同等ノ學力ヲ有シ本校所定ノ入學試驗ニ合格シタルモノトス、但尋常中學校卒業者ハ體格並獨逸語ヲ檢ス 第十條 入學試業科目次

ノ如シ 一、體格 一、學業 物理學化學動物學植物學、和漢文、獨逸語、數學（算術代數學幾何學三角術） 第十一條 入學試業

ヲ要スルモノハ受驗料金參圓ヲ願書ニ添ヘ差出スヘシ 第十二條 入學ノ許可ヲ得タルモノハ入學料金壹圓ヲ納ムヘシ 第十六條

左ノ各項ニ該當スルモノアルトキハ其情狀ニ依リ譴責除名停學若クハ放校ニ處ス、但放校ニ處セラレタルモノハ文部大臣ノ特免ヲ得

ルニアラサレハ復校ヲ許サス（各項略） 第二十條 授業料ハ一ケ年金貳拾圓トシ二期ニ分チテ納付セシム

第四章 試業 第二十三條 試業ヲ分チテ左ノ三種トス、學期試業、學年試業、卒業試業 第二十四條 學期試業ハ各學期末ニ於テ

其學期間ニ履修シタル學業ヲ檢シ其成績ハ學年試業ノ成績ニ積算ス 第二十五條 學年試業ハ各學年末ニ於テ其學年間ニ履修シタル

學業ヲ檢ス、但第四學年末ニ於テ特ニ內科學、外科學、眼科學、婦人科學、產科學全體ニ就キテ更ニ其學力ヲ檢ス 第二十六條 卒

業試業ハ理論ト實驗ト二種トシ第四學年試業ヲ了ル後其成績ヲ按シテ實際治療ヲ執ラシムルニ適スルヤ否ヲ檢ス 第二十七條 卒業

試業ハ毎年五月第一月曜日ヨリ凡十週日以内ニ終了ス、但其終了期ハ受験者ノ員數ニ依リ其都度之ヲ定ム 第二十八條 卒業試業ノ
 理論試問ハ左ノ科目ニ就キ筆答セシム、解剖學、局所解剖學、組織學、生理學、內科學、外科學、眼科學、婦人科學、產科學、精神
 病學、藥物學、衛生學、法醫學 第二十九條 卒業試業ノ實地試問ハ左ノ科目ニ就キ其成績ヲ檢ス、但前條理論試問ニ及第セシモノ
 ニアラサレハ之ヲ受クルコトヲ得ス、組織學、內科學、外科學、眼科學、婦人科學、產科學 第三十條 試業ノ成績ハ評點ヲ以テ其
 優劣ヲ判ス、其評點ハ十點ヲ以テ最高點トシ一科目四點以上各科目平均六點以上ヲ合格トス 第三十一條 學科目ニ依リ試業ヲ行ハ
 サルトキハ平素日課ノ成績ト勤怠ノ狀況トヲ參酌シテ其試業點ヲ附スルコトアルヘシ、但出席評點ハ總テ學科評點ト均シク試業點ニ
 積算スルモノトス 第三十二條 學期及學年試業前ハ二週日以内科目復習ノ猶豫ヲ與フ 第三十三條 病氣ニ依リ試業定日出席シ難
 キモノハ府立療病院ノ診斷書ヲ添ヘ其旨届出ツヘシ 第三十六條 生徒ハ試業問題ニ對シ意見ヲ述ヘ若クハ其ノ評定ニ付不服ヲ訴フ
 ルコトヲ許サス 第三十七條 卒業試業ニ合格シタルモノニハ左ノ書式ニヨリ卒業證書ヲ授與ス（書式略）

抑も、京都府政が誕生したのはもとより明治元年であるが、京都府會の初會は十二年である。その府政第一步を踏
 みたる初代京都府知事は長谷信篤（京都産、明治元年四月——八年七月在任）であり、その後わが醫學校時代の知事
 を舉げると、

第二代	横村正直	山口 産	明治八年七月——同十四年一月
第三代	北垣國道	京都 産	明治十四年一月——二十五年七月
第四代	千田貞曉	鹿兒島 産	明治二十五年七月——二十六年十一月
第五代	中井 弘	鹿兒島 産	明治二十六年十一月——二十七年十月
第六代	渡邊千秋	長野 産	明治二十七年十月——二十八年十月

第七代 山田信道 熊本産 明治二十八年十月——三十年十一月
 第八代 内海忠勝 山口産 明治三十年十一月——三十三年三月
 第九代 高崎親章 鹿兒島産 明治三十三年三月——三十六年二月
 第十代 大森鐘一 静岡産 明治三十六年二月——大正五年四月

である。茲にこれら歴代知事が、本校の發達に寄與したるその治績に對し深く敬意を表したい。

十七校友

この時代に於ける異色の學友をたどってみると、

第一回生として、明治十七年の高田畊安がある。卒業後更に東大に進み醫學士となり、湘南に呼吸器科南湖院を経営し、その院長として令名を馳せた。高田式聽診器は博士の考案である。大正五年二月十四日、論文「肺結核の早期診斷法」にて學位を授かる。星野元彦は教諭に進み、後、市内に内科を以て開業した。香山晋次郎は京都醫學會創立當時の役員であり、東山病院の副院長になった。

十九年の三宅宗淳は市内小兒科の大家であり、乳兒脚氣の創見者として當時斯界の雄者であり、その豊かな實見の發表ぶりは今に彷彿とする。谷口甲子郎はいつも京都府醫師會議員總會の執拗なる辯論家であつた。中田彦三郎は陽明學者三輪執齋の後裔であるときいたが、さすがに品の良い醫人であつた。西村千吉は京都市醫師會の溫平たる理事

であつた。稻田左膳も府醫師會郡部を代表して永年に亘る耆宿である。

二十年の安野郁太郎も兩丹を代表する府醫師會多年の溫厚なる議員であつた。小森芳次郎は親鸞信仰の紳士であつた。中村正勁は久しく府市醫政に理事者として携わり、齋藤、菅野兩醫師會長の片腕であつた。中辻丹治も府市醫政の理事に没頭し、殊に社會保健醫療の擴充と啓發に一生を傾倒し、その丹精は中央、地方に高く評價された。足立慶三郎も福知山地方醫界の重鎮であり、府醫師會總會における論客であつた。河方八十郎は滋賀縣高島郡の邊地にありながら、多年同縣の醫師會長に重任していた。

二十一年の木村得善は市内岡崎に京都病院を主宰し、鶴のような醫人であり、詩人であり、書家であつた。徳岡新之助は川端三條の民衆的流行醫であつた。佐谷省一も府醫政界の溫厚なる代表人であつた。

二十二年の大垣の外科病院長吉益雄太郎は猪子教諭の高弟であり、濃美大震災に教諭を助けて救護に盡した。萬病は一毒なりと喝破したる大醫吉益東洞の後裔なりときく。益井信は市内千本の眼醫者として衆人に膾炙し、當時大きな施設の持主であつた。湯川玄洋は名聲かくれもない大阪の胃腸病院長であるが、その門よりノーベル賞の湯川大博士を世に贈つた。四十四年二月二十一日學位を受く。

二十三年の山本小太郎は近江八幡に開業のかたわら、學校衛生の開發に着眼し、京の遠藤大太郎と共にその功勞を高く表彰された。

二十五年の坂部秀夫は府市醫政多年に亘る理事者であり、京都市醫師會長となつた、今に健かなる京都醫界の長老である。明治二十七、八年役には赤十字社醫長として病院船に奉仕した。宇野半吉も猪子教諭の門下として市内有數

の外科醫であつた。内科助教諭となりし淺木直之助は教諭に進み、辭して丸太町烏丸に業を開き、市内隨一の流行醫と讃われた。長壽を遂げて昭和二十八年春大往生した。大前二作は軍醫として身を鍛えただけに軀軀強健、和歌を友として八十の壽をかくしやくと樂めり。服部奎之助も猪子門下であり市内に外科病院を營んだ。

二十六年の朝井元章は神經精神科教室創設に助手となり、助教諭より教諭に進み、後市内に神經科を開業せしも間もなく永眠す。母校愛に富み生徒に親まれ、醫學會と圖書館につくした。馬杉篤彦は軍醫監に昇り、日露役の勲功者である。

二十七年の高木克敬は謹直篤信なる助教諭として診斷學と内科實地とを教ゆ。平井教諭と共に京大に轉じ、教授を助けて小兒科教室の創設に力を致し、後ち開業し、小兒科と云えば高木先生と稱するほどに晋く敬慕された。奥澤禮次郎（後ち融禮次郎と云う）は淺山教諭の嚴しい修練をうけて眼科の教諭に進みしが、辭めて東山區に開業した。久富猪一郎は内科にありて病理學を擔任し、後ち北野神社の近くに開業した。

二十八年の田村克之は加門教諭去りたる後の解剖學助教諭となり、自宅では内科を診療していた。初代解剖學田村教諭の令息である。大石桑次郎は日露戰役に赤十字社救護醫長として従軍の後、開業す。府市醫政の熱心なる理事者であつた。賀川玄吾は賀川流産科の名門である。福井逸起も山城八郡醫界を代表せる京都府醫政の眞面目なる理事者であつた。山本平理は神經精神科教室當初の助手なりしも、兵庫縣に開業して了つた。

二十八年組には異彩ある者が多い。外科の革島彦一、眼科の駒井房吉、外科の竹岡友信、内科の高橋隆三は助教諭となつた。才人革島は猪子教諭に厳しく鍛鍊され、瀟灑なる病院を新設し、その施設は今に盛である。駒井は溫厚な

る翁となりて家門榮え、母校八十年式にも列した。竹岡も猪子外科の門下として市内に開業す。有名なる醫史學者・儒醫竹岡友仙の息である。池田茂は日露役の日赤病院船醫長であつたが、精神病科舟岡病院長となり、晩年岩倉病院第三醫長となつた。

このクラスには中國に活躍の三羽鳥がいる。一人は河端貞次。彼は上海に開業し、同市の民政指導者として眞に衆望あり、終に上海市長に擧げらる。惜しいかな、重光大使が隻脚となりしあのとときの兇徒爆彈に一命を犠牲にした。河端貞次傳が出版されている。山本忠孝は北京に病院を大きく經營し、醫政にも關與した。大正十五年六月一日我が京都府立醫大より學位を受領したる最初の人である。雨森良意は京都の人、その一生を中國人と同化し、中國開發の志士に伍していた。このクラスにはまた佐藤總吉がある。在學中すでに革新的見識あり、卒業後人格を完成して福知山に佐藤病院を經營し、大正の末には中丹時報、福知山新聞を主幹して成人教育につくした。儒學に精しく俳道に徹し芭蕉に直結し、今も俳誌「餘花」を主宰す。翁こそは正しく京都府民の先覺、京都醫人の師長である。その著に「昭和榮根譚」と「杏雨句集」がある。書道にも南画にも趣味深く、今にかくしゃくたり。

角田隆もこのクラスに屬す。三十一年五月助教諭となり病理學及病理解剖學を擔當し、三十四年四月助教諭となりて本學病理學教室を創業す。翁は今や正しく七十九歳、如實にかくしゃくとして昔ながらの風姿を具え、晝間は日々病理學教室の名譽教授室に籠居して學徒の特別指導に寄與し、朝夕はすぐそばの愛園にて畑いじりにいそんでいる。翁は實に我が學友の最長老であり、本學の最高指導者であり、本邦病理學界の耆宿である。病理學教室階上毅然たる還暦の壽像は、正しくその風格と學勳を象徴している。

三十年には尾見薫あり。猪子外科の高弟として滿鐵大連病院外科部長となり、院長に拔擢せられて宏壯なる病院を管理したるその力量は學友の異數とたわれた。谷靜也も猪子外科の秀才とたわれたが儒者谷鐵臣の後を繼ぎ、市内に谷病院を開いた。小笠原孟敬は市内有数の産婦人科醫であつて、醫政にも市政にも關心をもち、府會議員にもなつた。荻野長太郎は島村神經科の門下であつたが、龜岡に開業した。

三十一年の日下清方は志を米領カナダに樹て、開業に成功し、今は老境を大阪に養っている。武内定義は熊本醫學校の解剖學教師として赴任したことあり、辭めて大津の開業醫となつた。淺山協太郎は淺山教諭を伯父にもち、この伯父に鍛えられて市内に淺山眼科の名を擧げた。樂しき餘生を伏見に送っている。西川式四郎は江州高島の藤樹書院に近く郷黨を照している。昨春八十の賀を記念に、句集「郁子」を知友に配つた。加藤賢は今嵯峨に樂居し、府醫師會が老醫を壽く會にも、昔ながらの溫姿をみせている。神經科にありし神尾英雄は日本生命に入り、一生をその醫務に捧げ、老後を仙臺に養っていた。常岡良三は學生時代一貫して首席を占め、卒業後一時熊本醫學校の解剖學教師ともなり、軍醫となりては金鷄勳章を授かる。微生物學・衛生學を志して蘊蓄を深め、三十六年四月助教諭に任ぜられてそれを擔當し、母校にその教室を創始し教授となり、角田、中村と共に本校出身の譽れある學長にまで進み名聲を擧げた。常岡式睥卵器を案出し、それが廣く需用されている。大正六年四月、論文「異性抗體に就て」を提出し博士となる。

三十二年の若山昇三は入學前既に藥劑師の資格あり、卒業後京大荒木醫化學教室當初の入室者となつた。業績成つて市内に胃腸科標榜の先驅として開業し、醫師會の會務にも協力した。往診に自動車を常用したる率先者でもあつ

た。板谷丈夫は在校中既に出色の存在であつてクラスを牛耳り、校友會と圖書館の創立に盡力した。日露の役、皇軍ダルニー（大連）を占領し軍政を布くや、逸早く同地に渡りて開業し、多年この地醫界の重鎮に推されて醫事衛生に貢獻した。晩年蘭領ジャワにも進展した。三浦久治は大阪産婦人科緒方正清の門に修練し、神戸に業を張り繁昌す。母校より學位をもらう。川越直三郎は私立京都癲狂院長を繼承し、今の川越病院を遺した。伊良子暉造は現代短歌大系第二卷に浪漫前期の歌人としてその名あり、歌名すゝしろのや、後に清白と云う。明治二十八年河井醉茗と知り、共に「少年文庫」に新體詩を投書し「明星」にも詩を出した。二十九年五月處女詩集「孔雀船」を刊行す。臺灣にて醫務に専心せしが晩年志摩鳥羽に開業す。府立醫大學歌は、清白が鳥羽にありて醫務の旁らの作である。坂寄義雄は本校最初の海軍々醫として日露役に殊勳を樹てた。脇屋次郎は陸軍々醫となり、明治三十三年役の支那塘沽連合駐屯軍に屬し、各國軍人と交りて令名あり。豫備役となるや大連に開業す。親鸞を仰信し、社會福祉事業に奉仕して其功勞を表彰された。伏原寅男は醫專内科の教諭となりて後ち辭し、市内に開業した。中村權は高山産婦人科の門を出で、伊賀名張に開業し今にかくしゃくたり。土屋榮吉は卒業後神經精神科教室に助手となり、のち精神科岩倉病院長となり、昭和二十年六月中部防衛軍精神病院として接收せらるゝまでこの岩倉病院の發展に力を致し、本邦精神病者療護の發達に貢獻した。昭和三年二月京都帝大より學位を授かり、昭和十年十月師友より還曆祝賀論文集を贈らる。多年醫政にも關與し、終戦直後の五年間京都府醫師會長であつた。

三十三年の佐々木博は在學中はや一見識を有しその姿も美しき長髮の革新兒であつたが、直ちに廣島加斗町に開業して丁う。河野俊之助は播州の儒家河野鐵兜を伯父にもつほどに、その遺風を有し、一たび豫備軍醫となるや、それ

に興味をもちシベリヤ出征軍に従い、後遠く樺太の眞岡に開業し、在郷軍人としての勲功を表彰された。油谷安次郎は濱寺の草分として、その篤信洒脱な人格が普ねく敬慕され、今も元氣に満ち満ちている。濱寺に著しく前ウラジオストックにしばし開業した事がある。藤谷功彦は京大森島教授に師事し、そこで秀でたる業績を成就し、本學初代の藥學教授となったがはやく逝く。四十四年二月京大より學位を受領す。吉田龍藏は廣島の所謂片山病流行地に業を開いたが、内科的疾患の大多數が肝と脾の腫大と腹水をもっているのに驚き、その原因的開明と豫防探求に志し、身命を賭して藤浪鑑教授等の研究を助け、遂に日本住血吸虫病の病理と撲滅を闡明せしめた。本學の誇とすべき社會事業の功績者である。郷黨は氏の頌德碑を樹てた。

三十四年の中村登は在學中すでに秀才とうたわれたが、果せるかな府大耳鼻科教室を創始し、本邦斯學界に斷然頭角を表わし、終に學長の名譽を荷い、二令息を後繼教授と小兒科教授に遺した。大正六年四月、論文「迷路の炎症に就て及其實驗的研究」をもつて學位を受く。大澤宏は京大今村精神科教授最初の門弟となりてその教室創設に努力し、後出て暫く大連に行き、歸りて新設鹿児島縣立精神病院長に落著いた。京大より學位を授與せらる。佐々木恒一は母校神經精神科の故老であり、助教授となり、一時部長代理をつとめた。市内に開業し、また郷里岡山に開業したが、再び來りて府廳に勤め、晩年福知山腦病院長となる。横田亮雄は高山產婦人科最初の高足であつて、鍛えたるその手腕は横田產婦人科の名聲を市内にほしいまゝにした。今は餘生を楽しんでいる。氏が高山恩師とその末亡人につくした永い間の報恩愛には、誰もが頭を下げる。三輪光治、この人も一生を愛國生命の保險醫務につくし、京都、松江、金澤と支店長をつとめた。牧浦忠次、巽達次も初めは神經科醫員であつた。岸本仙次は多年開業の勞を今は丹後

由良の海濱に慰し、老先生と敬われている。

三十五年の加藤傳次郎は永年勤続の京都府衛生技官であつたが、今はその老練を惜まれて退官した。山本秀暉は温厚なる町醫として中京に慕われていたが、今は老境を清閑に隠れ多年培養の信念に活きている。森正司は市府政界の立て者であつて京都市醫師會長にもなった。

以上は京都府醫學校時代の印象的な校友を偲んだのであるが、この時代に次ぐ三十六年には本校の存廢事件があり、三十六年生は三六黨と自稱し、島村校長をかつぎ、舉りて猛運動し、終に存續と決議せしめた。その運動の頭領に梅原信正あり、醫博梅原教授が本學興隆の爲に一貫して發揮したる熱烈なる母校愛、學友愛の足跡は實に大きく、學内に青蓮同窓會を結成し、それを牛耳つて活動の根據とした。學勸もまた癌研究者として昭々たり。副頭領に醫博野田浦弼あり、母校神經精神科第二代教授となり、後堺町三條に開業し晋ねく慕われた。

十八 追 憶

私共が本學史編纂を分擔するや、その資料を詳細に亘り蒐集しておかばやと思い、京都府醫學校時代の卒業生諸氏に宛て、母校に在學時、奉職時、若くは研究當時の事蹟を追憶のまゝに書き流して、その草稿を惠贈せられたしと懇望した。また訪問して書取ることとしたのであるが、健在者はもはや數少なく、僅に數篇を得たのみである。しかしこの數篇は、この時代の本校を想察するに餘りあり、誠に興味ある貴き追憶なるを以て、敢て茲に抄録した次第である。

(一) 明治廿七年卒業 中川主一郎書簡 卒業試験科目には一大科目、二大科目、三大科目があり、在學中習つた全科目について行われた、一大科目というのは解剖（加門）、生理（宮入）等である、醫學校へ入學する迄は獨逸語學校に居た、醫學校の校門を入ると、ずつと上り坂になつていて、左側に療病院の碑が建つており、坂を上りつめた所が解剖學教室だつた、解剖學教室の周圍は竹藪で晝間薄暗く氣味の悪い處だつた、そこで屍體解剖をやつた、四體ばかり正規の實習をやつた外に夏の休暇にも解剖をやつた、病院の入口には前に小さい溝の様な川があり、それに橋がかつていた、卒業後はらくの間の間外科（猪子）に居たが、當時外科教室には五、六名がいた、月々五圓の月給を戴いた、外科に在る間に一度だけ手術をさせて貰つた、猪子先生が横に立つておられて、副乳を摘みとる様に云われてやつた、當直の或夜、肺臓瘻で死にかけている患者のために起されて、病院の北の端にある當直室から、看護婦の差出す雪洞の灯を頼りにはるばる南の端の病室迄行つた、その時の耐まらぬ臭氣が今でも時折鼻について忘れない、我々の頃にはまだ運動會などなかつた、琵琶湖の三井寺下に學校のボートがあつて、時々數人で漕ぎに行つた、一度堅田の方へ漕ぎ出した處、歸りが案外おそくなり、廻りがすつかり暗くなつてしまつた、大津もまだ開けていない頃で、唯一つ防波堤の上に灯つている燈臺を目當てにして歸りつき、どこがどこやら解らず仕方なしに葦の中へボートを乗せて歸つた。

(二) 角田隆談（三宅宗隆筆記、學長公室にて、廿八年九月） 明治廿五年醫學校へ入學したのだが、入學前醫學豫備校へ通つてゐた、私はその頃平安中學に在學中だつたが、そこを途中で逃げ出し豫備校へ入學、二年間勉強した、當時上田勝行はまだ東京に居り、豫備校校長は原口隆造だつた、原口氏はレーマンの弟子であり、豫備校設立者でもあつた、醫學校へ入學した頃、學校の教場は四つあつた、三つが南の方、今の三階建の所にある交換室の邊り、一つは正面を入つた所、今の本館建物の所にあり、前の飾り付が城のやぐら式にしてあつた、解剖、生理、物理化學及び無所屬として四つの教場が使用されていた、總て平教場で木造の柱が建ち、天井は紙張で、雨の日には雨漏りし、それがはずれて勉強中頭の上に落ちて來た事もある、生徒は五十人足らず、東南には解剖實習室があつて、そこで系統・病理解剖が行われた、解剖室から教場へ廻る處下がついており、そこに細長い組織實習室があつた、當時生理學宮入、解剖學

加門、物理化學喜多川藥局長、物理水野三高教師、獨逸語田中（レーマンの弟子）、病理學星野元彦、之は生理研究室に同居し、平生は内科におり、標本もなく唯講義だけ聞いた、校長猪子、眼科淺山、婦人科足立、内科平井、神經島村、内科笠原、笠原氏は海外私費留學中平井氏に内科を擔當させ、歸朝後しばらくして平井氏を小兒科へ移した、法醫島村、耳鼻科、皮膚科は外科に屬し、物理化學は生理に屬していた、解剖實習用のライヘは一年十乃至二十體で、然もこれは病理解剖後のものを貰い上げ、固定せず、ずる／＼のまゝのを書物と比較しながら切つていた、生化學も生理に屬し、今の様に分れていなかった、ミクロトームも小型のもののみあつて、解剖室で組織を切つた、加門氏自らレバーにスティックをはさんで切り、それを水に浮べて下さる、我々は之をへマトキシリンで染めたものである、學生用のミクロスコープが十臺ばかりあつた、南門を入つて十歩、そこに控室があつた、控室には爐が切つてあり、怠け者が集つてはわい／＼やつていた、土橋という教務主任が之を叱りに來れば、皆一齊にワーと教室へ入つていつた、當時の醫學教育と云うものは、難しい理論は二の次であり、西洋醫學を普及するために速成主義に一貫されていた、之は唯我々の醫學校のみでなく、全國どこでもそうであつた、解剖教室に喜八という古い小便が居た、偏箱だつたが忠實な奴だつた、宮人氏がグルンドの中心人物であり、それに反して加門氏はお人好しであつた、生理はその後富水氏に代り、我々の卒業試験はこの人に受けた、間もなく大阪へ移つたが、實驗も實習もやらす講義だけしておつた、人とも交際せず、唯書物はかり讀んでいた變人であつた、猪子氏は學校へ來た時、全くずぶの素人であつた、内科の星野氏に立會つて貰いつゝ手術をやつた、それが獨學であれ迄酒きつたのである、淺山氏も獨學の方であつた、ともかくあの頃は、大學校を卒業すると直ぐに赴任したのであるから、獨學せずにはやれなかつた、當時は醫學士が三人以上居らぬと甲種醫學校と認めなかつた、唯島村先生は洋行をすまし、専門家として本校へこられたのである、精神病室は現在の病理の所に建てられた、私は十七歳の年本校へ入學したが、十六歳で入學した者もある、入學について學歴の制限がなかつた當時は、入試にパスすれば誰でも入學を許された、だから履歷、年齢は全く様々で、三十歳前後に至る者もいるかと思えば、小學校教員、巡査、人力車夫もいると云う有様で、若い初心な少年が約三分の一、残りの三分の二は晩學の輩である、入學後は半期に一回の學期試験で半年分の範圍

を、學年試験で一年分の範圍を試験された、宮入先生だけが口答試験を行い、他は筆記試験である、六十點未満は皆落第で半分位はすべるのである、二度續けて落第すれば校門から落第する、これで約三分の一放校になった、我々は九十人入試をうけ、四十人餘りがパスしたが、この中一緒に卒業した者は十八名位で、その他の同期卒業生は我々より上級から落第して來た集團だつた、解剖體察は私が入學する以前よりすでにあり、随分古いものだ、我々の入學前、田村という先生が居つたが、その先生の在學中よりすでに京極の誓願寺で行われていた、三年生になると四年生と共に臨講をきき、内科、外科を見學する、四年生になると、各科の學用患者三十人許り選び、學生二、三人に患者一人を持たせて、カルテ記入、廻診を行わせた、勿論治療は許されない、臨講の際その患者が出されると、病歴、現症、治療を書きあげて、プロフェッサー、學生の前で朗讀するのだつた、外科では猪子先生が傍についてホーデンツベルクローゼの手術をやつた、結紮の時に綿屑を残して叱られた事を思い出す、交換場には四年生が數名ずつ交替で行き、處置番をもつていた、婦人科は教授が横について内診をさせたが、外科の様に手術はさせなかつたし、お産にも立會わせなかつた、あの頃はゲブルトでの入院はなかつた、内科は笠原氏で、臨講の時間には、机を一方にかたよせて皆を集め、患者を入れて、學生が病歴、現症、治療を朗讀し、先生の批評をうけた、毎週一回これが行われ、眼科は、學生の内當番に當つたもの數人が出かけてゆく、淺山先生が診察中に討論をして色々教えた、手術としてはカタラクタが多かつたがトラホームも多く、硫酸銅の結晶で結膜を裏がえしてこすつた、外科の手術見學も別にあつたし、また學生の預つてゐる患者の手術にはその學生が立會つた、島村先生は法醫學も擔當して居られたが、先生の部屋は今の皮膚科の所邊りにあつて、そこに診察場があつた、そこから北の方へゆくと内科になつていた、笠原先生が歸朝してからそこが小兒科になつた、我々の時には卒業式と云うものではなく、卒業試験にパスすると事務所から證書をくれてそれでしまいだ、だから早く卒業證を貰うものや、遅く手にするものやまち／＼だつた、卒業證書には氏名年齢を記して、卒業證書と大書し、右の者京都醫學校の規程の學科を修了し卒業せることを證す、猪子云々とあつて、裏に受持教授名、學科名を示してあつた、證書番號は別に成績の順位には關係なかつた、學年學期試験では順位に従つて教室の座席を定めた、つまり成績の悪い者程後の方に坐つてい

たのである、私は醫學校を明治二十九年に卒業してから、しばらく笠原氏の下におつた、在學中は、卒業後何をやるうか等とは考え
ていなかった、とにかく笠原氏の所に居させて貰つたが、大體病人を見ても解らんし、第一ムンテラが最も苦手で嫌でならない、全
く困つていたのであるが、丁度その頃笠原氏が外遊より歸朝され、外國のバトロギー、バクテリオロギーのクルズスを持つてこられ
て、我々の様な變りものにそれを見せて下さつた、臨床に興味のなかつた私にはそれが大變面白く、讀みふけた、その内に、こん
な奴はクリニシヤンにしても仕様がなと思われたのか、君バトロギーをやらんかと云われた、そして私は本校から派遣委託生とし
て東京大學へ行つた、當時、三浦教授、山極助教授、金森助手がおつた、私は選科生と同じ部屋に机を貰つた、矢張り病院でかせぎ
つゝ勉強していた者が多かつた、三浦氏はその頃もう衰えており、山極氏が解剖とヒストロギーのクルズス、講義もやつておられ、そ
の講義は整然としていた、ベルツが居つた頃で、解剖は一年に二百體位、解剖のある毎に青山、近藤等のプロフェッサーがやつて來て
討論していた、ヒストロギーのクルズスは、山極先生が學生の頃からやつて居られた、その頃學生が約五十名位居つて、選科生が標
本や、プレパラートを作つて學生に見せ勉強させていた、今の東大に比すれば雲泥の相違である、私は約二年間ここで勉強していたの
だが、當時本校から他へ派遣されたのは私一人でなく、高木克敬が東大小兒科へ、星野元彦は最初に東大へ派遣された、思い返せば、
私が活躍していた時の方が今よりも解剖數が多かつた、解剖する屍體は學用患者や刑務所服役者のものが多い、近年解剖數が減つたの
は、生活保護法等によつて、從來は學用患者となつた様な人が學用患者にならないからだ、生活保護法の患者などは、死ねば解剖する
ということを學會、議會を通じて請願すると良い、これにひきかえ、ドイツに於ける解剖數は日本とは問題にならぬ程多く、日本で五十
年かゝる程の數を一年間でやつており、ドイツに於ても、解剖は本人家族の同意を要する事になつているが、之は殆ど守られず、日本
の生活保護法に類する患者は總て解剖する事になつており、一つのクランケンハウスで一年に三千乃至四千體を解剖する、本學では開
校以來今日迄で約四千乃至五千體である、日本の病理學は解剖數が少いという點に於て外國に拮抗できない、病理學はメンシエンバト
ロギーであるから人體の解剖が根本となる、従つてかゝる狀態では研究教育上支障を來すのは當然である、さて、私は明治卅一年本校

に來て病理を受持つことになつた、然し書物一冊、ブレブラート一つなく、唯小さい部屋が一つ二つあるだけで、書物を買つて呉れと云つても、校長は「そんなもの要らないのでなあ」といわれるのである、笠原先生が書物を買して呉れたが、私も四五十圓の月給から書物を買つた、解剖の材料も一つ一つ集めて標本にし、手に入らないものは東京まで出張して一つ二つ貰つて來た、當時はまだ京大がなかつたので、時々珍らしいものが入つてそれに夢になつた、腎臓のエヒノコックスが二例あつたし、片山病の腦へきたもの等があつて、それをドイツ語のレポートとしてドイツの醫學雜誌にのせてもらつた、この最初のドイツ語の論文をみた時は眞に嬉しかつた、所が五十年後の第二次大戰後、アメリカ人が私の彼の成績を引用して呉れている、五十年前のものが生きて來たことは嬉しい、私はドイツ語で論文を書き、ドイツの雜誌にしきりに發表しておいたので、その後ドイツへ行つた時には少しはドイツ語にもなれており、名前も知られていたので、苦勞も少く悠々とやる事が出來た、さて病理學教室を創建した時、書物もなく困つてゐる矢先、京都大學が出來、澤山の書物を買ひこんだので之を利用する事が出來た、然しそうする迄には、標本も書物もない教室におつて、何度もやめて内科醫者に戻ろうかと思つた、藤浪教授は人格者であつた、私は藤浪さんの御蔭で京大の書物や標本を利用する事が出來た、私は生來無器用で人並の趣味や楽しみはもてなかつたが、唯二つだけ自慢出來る楽しみをもつてゐる、それは畑いじりと學問です、今でも午前中は畑いじりをし、午後は顯微鏡と書物に親しんでゐる。

(三) 廿五年卒業 大前二作談 十七、八年頃、東京に醫學豫備校獨逸語學校が出來たので京都にも設立せんと、時の半井澄、山

田文友、安藤精軒其他有志大家が、醫家、藥家等を網羅して富小路夷川南人東側に京都醫學豫備校・京都獨逸語學校を開設した、私が入學したのは廿年四月であつたが、原口隆造が校内に居住し一切の事務を擔當して獨逸語を教授した、外に醫學校教諭上田勝行、栗生光謙、藤井良吉の四人が教えた、何れも醫家の調劑生が對象で、午後一時開校した、生徒は三年生に谷田三郎(有名な獨逸法學者、大阪控訴院長、法博)、中川孝太郎(法博)、二年生中原徳太郎(東大醫博、代議士)、長瀬復三郎(東大醫卒)等が居た、一年生は吾等拾五、六名、高木克敬も居た、此時代が丁度醫制改革の時で、各縣の乙種醫學校全廢せられ、優秀なる甲種醫學校のみ存置となり、

此時の廢校生徒がなだれこみ、多數が志願し異色の混合體となり、年齢の差異が甚しく、吾等の廿歳前後を中心に、廿七、八歳も在り、田舎で開業していたが斬新の醫學を學びたいという川歳以上の老學徒も在った、入學發表後祝賀懇親會があつたが、會費勿論卅錢で、酒も充分飲めた、校職員は、半井澄校長勇退の後をうけ、東大卒業新進の猪子、淺山、齋藤仙也の三人が赴任し來り、三人は非常に親密であつたし非常に人氣があつたが、齋藤は野に下り、代つて佐藤（廉）となり、笠原（光興）となり、權威のある學校になつた、この鳥合の學徒を鎮壓し、校長を補佐し、病院・學校を監督した幹事に相田義和があり、古武士的の堂々たる人で、この人は學校に偉大な功績があつた、二年生の始、生徒は必ず詰襟の洋服を着し、帽子（正規）にMSの徽章を附けねば登校を差止めるという嚴則が出て全校大恐慌を來した、一年の後期（十月）に某教諭の有機化學がむつかしく腦に入り苦いので、この試験をうけないと「スト」に入つたが、結束を堅くするため日々御苑内芝生に集つた、しかし最後に猪子校長が全校退學處分を斷行する決意を披瀝したので終末を告げた、私は此時、猪子先生の謹嚴なる態度に偉人であると直感した、廿四年十月有名なる濃尾大震災の在つた時、文部省より全國醫學校外科主任と當時四年生主席三名引卒して急遽現地救済に派遣する事となり、神服奎之助、徳尾野太郎、宇野半吉が猪子先生助手として出行した、其の他印象として記憶にあるは、卒業試問が嚴格であつた様に思う、五月より一月迄一人宛試問の封紙に捺印を受ける事なれば、同級生で卒業年次が一、二年遅れた人もあつた。

四 二十九年卒業 佐藤總吉談（藤田尚男記）

卒業後島村先生の神經科へ入り、間もなく峰山の北丹病院へ歸り、半年程して京都へ来て同志社病院に居た、その後、兵隊（工兵）に行き、日露戰役の時軍醫になつた、その後京大外科に居り、次に福知山で開業した、その間孫逸仙の仕事を手傳うつもりで支那へ渡つたが、半年程経つと彼が大統領をやめたので歸國した、角田隆は熱心な勉強家であつた、卒業後病理に入り四、五年後にドイツへ行つた、何といつても努力家だつた、廿九年頃には廢校事件の空氣はなかつた、口清戰爭の影響は醫學には全くなかつた、長い間かゝつて卒業試験があつたため卒業式はなく、試験終了と共に各人ばら／＼に證書を貰つた、臨床の試験は専ら口頭試験だつた、廿九年頃の醫學校は四年制で、教師が揃つて居り最盛期だつた、當時醫大は東京に一つあ

るだけ、本校はドイツ語を採用した、その原因は往年の外人教師にあるらしい、入學試験はやさしかつた、基礎教室は不完全で講義實習のものにすぎなかつた、病理教室は内科に附屬して居り、後年角田氏が獨立させた、山本忠孝、雨森良意は卒業後間もなく北京へ行き、山本は北京で開業し、雨森は袁世凱一派の支那政府の人々と交際していた、雨森の志は政治にあり、醫者は餘りやらなかつた、猪子先生は東大出身、「スクリツバ」なるドイツ人に外科を學び、府立へ來て外科醫をつとめた、學内は派閥争いなく、専ら學問する状態だつた、當時支那へ行つた人が多かつたのは皆個人々々の意志によるものである、學内に「振元會」があり雑誌を發行していたが、これが「校友會雜誌」の濫觴である、自分が二年の頃から始つた雑誌であり、新しい時代思想に觸れた文章が随分發表された、尾崎紅葉、北村透谷、幸田露伴、高山樗牛等の思想が影響して居た、文化活動をしてゐた主な生徒は、河端貞次、伊良子清白、楠瀬象作氏等であつた、教師では、宮入慶之助氏が文化活動を支持し隨筆的なものを多く書いたが、この様な活動を阻止する空氣は全く見られなかつた、學内には「體育關係の派」と「文化的の派」とあり、前者は對外的な活動はなかつた。

(四) 三十二年卒業 土屋榮吉書簡

私が母校に入學したのは、恰も二十七、八年戦役の後半、大勝利で終結の年であつた、校友會の創設は私の一年の時であつた、校友會成立するや加門教諭はその委員長となり、いつも委員會の議長席につき、生徒の委員をして自由に談論、討議せしめ、それを快く聴取し指導した、校友會が圖書館を創始したのも加門先生の盡力であつて、それを助けたのに神經科の朝井助教諭と、生徒では我が級の板谷丈夫があつた、私も在校中、校友會と圖書館の創立と、校友會雜誌の編輯に盡力した、卒業の時「久しく本會の爲に盡瘁せられたるは深く感謝する所なり 聊か不腆の物品を贈り其勞を謝す」と猪子會長より水晶印をもらつた、明治卅四年十月療病院醫員を辭するときも、校友會長より「貴下療病院御在職中本會の爲一方ならぬ御盡力に預り奉鳴謝候 右御禮申述度」と謝狀をもらつた、かくて私は、校友會創立より今日の學友會まで、今にそれに關與しているわけである、三年生となつて、助教諭の高木克敬に診斷學とその實習を、革島、松山に外科總論を、朝井に神經診斷學と電氣療法とその實習を、淺木に藥物學と診斷實習を教わつた、四年生の各部長の講義は朝八時より十時迄であり、十時より、一週間交代に組分けし、各科の外來臨床に出た、

午後の講義は多くは臨牀講義であつた、外來臨床は、診察室に出ると看護婦主任より、自費と學用の別なく順次に新患のカルテを當てがわれて、その既往症を記載し豫診する、豫診した患者の部長診察には、近く侍立して症狀診斷の質問に應じた、各部長ともなかなか懇切に指導された、臨講は其科の診察場か手術室であつた、學用患者の時は豫めそれを順番に擔當し、其の病床誌を作つて提出した、それを臨講の時に随分酷しく批判された、自費患者も供覽される、手術場では手術前に臨講される、それは自費、學用を問わなかつた、私等は京大の部長教授となつて名聲を馳せた諸教諭の、圓熟した蘊蓄に訓育された事を今に光榮としている、當時の卒業生が夫々實地醫家として母校の名聲を揚げたのも故なきにあらずと思う、卒業試験を受けた事で唯一つ今に印象的なのは、猪子教諭の外科實地の時、私は「龜頭冠狀部の小創」が當つたが、それを「毛切」であるとして他のものとはつきり鑑別した處、一言もなく「よし」と云われた事である、これは猪子先生なるが故に嬉しかつたのである、私の頃は學說實地共に二カ月位で了り、六月に嚴かな卒業式があつた皆同時に集立ちした、式後謝恩會を圓山公園の料亭で催し、そこで最後の氣勢をあげた、此頃本校の廢校問題が擡頭したのであるが、島村校長だけは毅然として居残り、人材を整備し、三十六年六月を以て京都醫專へ昇格した、その梗概は本學一覽（昭和十六年）の第三期醫學專門學校時代に明記してある、在學中の運動團體、靜虎團の短艇部は、近畿諸學校の短艇部と競争して、常にその覇を稱えていた、武德會が主催の琵琶湖ボート大會にて、當時の雄滋賀師範と爭艇中、一つのオールが半折したにも拘らず優勝して、意氣昂然たる場面もあつた、私はこの短艇部に入つていた、振元會と靜虎團とを交流して、漸く校内の大同團結が成立したと喜んでゐると、新入生の中に學生矯風會なる小黨を發起したものである、私は板谷丈夫と、一夜にて「學生矯風會の成立を難す」と題する機文を作り、學生控室に大書掲示して校内の耳目を聳動せしめ、また同じ題の論文と、「校友會觀望及希望」を校友會雜誌上に發表して小黨分立の弊を述べた事もある、卒業後私は神經精神科教室に入つて二年間研究させてもらつたが、その間の辭令を試みに記載して見ると、

「明治三十三年九月 京都府療病院三等醫ヲ命ズ 但月俸十三圓給與、三十三年七月 自今月俸十五圓給與、三十四年二月 自今月俸二十圓給與」である。

(六) 卅五年卒業 加藤傳次郎書狀

我々の卒業した時代は學校の一番悲慘な時代であつた、木屋町御池の醫學豫備校（獨逸語學

校）三年間の後醫學校へ入學したが、既に豫備校の頃から醫學校廢校の噂があり、その爲名古屋の方へ轉校した者もあつたが、醫學

校入學後は他へ轉校する者はなかつた、豫備校からは無試験で入學出来る様になつていたので、我々の時も約四十名が豫備校から進學

し、その他から四十名が試験をうけて入つた、この頃は何回落第しても退校にならないので、入學當時から學校への多額納税者が澤山

いた、従つて三十以上の親爺から二十位の紅顔の美少年迄いた、服装は大部分詰襟だつた、授業料は年額廿圓で前後に分けて收めた、

入學時の校長は猪子先生で、我々の在學中現職のまゝ洋行された、京大醫科大學が設置される時、猪子先生は將來醫科大學の教授にな

ると云う約束のもとにその建設委員に加わり、醫科大學設置後京大へ行つてしまつた、加門先生が後を引繼いだ、加門先生も京大へ

移つて、その後に島村先生となり、我々の卒業時も校長であつた、猪子始め笠原、平井、加門、淺山の諸先生が相ついで京大へ移り、

その下のズブや助手の優秀な者も引抜かれた、當時の規則で、醫學校には三人以上の教諭は醫學士でなければいけなかつたので、その

頃市内で開業していた古い新宮涼亭を教諭とした、講義も粗末なもので、例えば細菌學の講義等、近頃の様な行届いた實習もなく、

唯、久富先生が、うどん屋が使う様な「ざる」に試験管を入れて來て黑板に繪をかくて説明した、外科の外來でゴノコッケンを見せて

貰ひ、内科で始めて結核菌を自分で染めてみた、眼科は淺山先生の後を融先生がやつたが、これが餘りやかましいので我々申合せて數

回授業をボイコットした、それが問題となり、我々は誹責處分となつて張紙を出された、冬は教室にストーブを置き薪を燃やしてい

た、薪がなくなると、後の空いている机をこわして燃やす様な事もやつた、運動會は鴨川の河原で行われた、ボートが天津の三井寺下

にあり、漕ぎに行つた、テニスは笠原先生が洋行土産にもち歸つたもので、これも河原でやつた、醫學校の生徒用校門は久宮家の前

を北に突當つた所にあつて、入つた所が生徒控室などになつていた、鴨川の東には京都織物と小牧牧場とがあり、北の方には小さい家

がぼつ／＼建つてゐる位のものであつた、病院の診察室は大體今の様な配置だつたが二階はなかつた様に思う、ポリクリは七、八人が

一組で一週間ずつ各科を廻つた、我々の頃から既に陸海軍醫委託制度があり、委託生は毎月七圓の給付をうけていた、志願する者が

少く、従つて願ひ出たものは全部採用されたが、數年後志願者が増加し、成績の良い者でないと採用しなくなつた、同期卒業生は四十八名であつた、入學時の半分で、残りの半分は残る譯だが、こうして卒業出來ぬ者が年々溜つて來たのを、その後日露戰爭の起つた機會に皆軍醫として送り出し、掃除してしまつた、四月には卒業試験前の休暇があり、五月から卒業試験に入る、成績順に五人を一組として各科目の口答試問をうけた、私は六番だつたので第二組の一番目だつた、婦人科ではファントムから人形を引張り出す様に命ぜられ、破水の起らぬ時の處置について油を絞られたのを覺えている、我々のクラスは、今日迄遂に一人も博士號をとる者が出なかつた、一年上下のクラスからはとつたものがある、我々のクラスの主席だつた井上喜久治は、胸を患つたため早く亡くなつたが、もし生きておれば必ず博士號をとつていた、恐らく角田先生より早くとつていた。

(己) 卅五年卒業 井上九藏書狀

私は卒業後北里研究所へ勉強に行つたが、在學中の細菌學の知識は甚だ幼稚だつた、久富先生が綿怪した斜面寒天の試験管四、五本を箆に入れて講義にくる、そしてその試験管を示しながら培養の話をし、黑板に圖を書き説明し、懸滴標本を實物なしで講義した、ノートも數十枚位のものであつた、その後ポリクリで外來實習をやつていた時に、始めて外科で淋菌を、内科でチールガベツト染色の結核菌を見た、淺山先生が駒井君を伴つて京大へ移つたので、融さんがその後に眼科をやつた、その頃私は家兎を使つて眼底検査の練習をした、或日曜日、生徒某が眼科の暗室で検査の稽古をやつていた、それを見つけた融さんがその男を追出そうとした、その男は大變氣の強い男だつたので、啖呵を切つて噴然と歸つた、それ以後同志を集めて徒黨を組み、融先生をボイコットしてしまつた、それがもとで融さんは辭めた、融先生の試験の時、星野貞直が眼底を見さへれたが、どうもよく見えな

い、先生が「どうだ、何が見える？」と尋ねると、講義口調で「眼底は朦朧として……」と云つたので、驚いた先生が「何、眼底がどうした」とつめよると、すつかり弱つて頭をかきながら「いや頭が朦朧としておりまして……」と答えると、「それは君の頭がぼんやりしている爲だ」と追出してしまつた、京大へ澤山の先生が移り、三人以上の醫學士の教諭が居ぬと醫學校として認められぬので、その頃、南禪寺に住んでいた新宮源亭さんをひき出して教諭にした、新宮さんは大の雷嫌いで、往診には人力車につて出かけるが、途

中、雷が来ると、どうでも屋根のある所へかけこまずにおられなかつた、生徒の中に先生の近所の者が居り、それが大變横着者で、平常この爺位に思つていた人の講義だから盛に彌次をとばした、とう／＼先生も腹を立て、「こら、餘り喧しくすると試験に落すぞ」と叱つた、するとその男は、「何、試験までいるつもりか、それまでにこつちから雷を落すぞ」とやつたので一同腹を抱えて大笑いした、數日後、その生徒が數人と連立つて先生を訪ねると、「あゝ分つとる、辭職勧告に來たのやろ、まあ上つてゆけ」と招じた、先生は僅か三日間診斷學を講義しただけでやめてしまつた。

(ハ) 卅三年卒業 今川鼎書狀 當時の入學は豫備校より入るのが過半で、中學卒業の證明があれば無試験優先であつた、無論豫備校からでも落ちるものが少くなかつた、豫備校出は四年間を通じ何となく或種の親睦さを味わつた、北隣の常盤ホテル（今の京都ホテル）が威壓せんばかりの豪壯さだ、或る日、山縣大將が軍輦で無難作にホテルから散歩しながら、學校玄關に掲げてある校名をいふかしげに見上げつつ行過ぎました、何さま校名は獨乙學校、醫學豫備校、藥學校の三重奏であつたからである。母校で先ず追憶されるのは、校門より向つて石疊み通路正面に異彩ある代表的建築物、本校講堂である、左右兩翼あり、右が各校舎教室に通じ、左が療病院に連なる、其左前庭に植村知事撰文創立紀念碑が建つてゐる、講堂の玻璃天井が特異であつた、玄關中央の階段より左右兩脇に分れて階段となる、樓上に登れば前面廣小路より、鬱蒼たる大宮御所や北側の御苑内や、建禮門の廣場が一眸の眺めである、碑文の末段に、後の政を此土に爲すもの以下の趣旨が能く徹底している事に深き想いを致すことである、襟を正して恩師の面客を偲べば、加門先生はよく「コレツ」「アレツ」の略稱を使われ、その綿密夥だしき基礎の講義が目前に浮ぶ、猪子先生は「ソノコノ」の連發で、流るゝ如き外科學の講義振りで、さすがに練達なものであつた、笠原先生の默想的まなじり、斷片様の句調で嚴密な講義、臨床では能く原書を朗讀して對比され學究的であつた、平井先生の内科、小兒科は快調でモダンで篤實であつた、高山先生は固有の喉頭音で、子宮癌の陰式全剝出術が如何に困難であつたかの熱質な手術様式が耳底にある、淺山先生はいつも生徒の顔を解かれたが、中途、洋行で臨床は融先生であつた、島村先生は剛柔調和がとれて生徒をそらさぬ、さすがに神經科では東に吳秀三、西に島村俊一、當時吾國斯界の双壁

で、本學動搖の際能く善處されたものである、校内囂堤の一部に精神病院の創設されたのも當時である、耳鼻咽喉皮膚科の江馬先生、外科の松山先生、診斷學病理學の高木先生、神經科の朝井先生が強く記憶される、其頃、校外見學で一度和田岬の檢疫所に行き、多聞通の不夜城情景が眼裏に残っている、都内での會合は四條河原町共樂館、圓山平野屋、鴨東森樹樓等であつた、随分雄辯家もあり、文才家もあつた、運動熱も盛んで、陸上部、水泳部、野球部もあつた、學修以外の事であるが、二年の頃、突然教室へ實吉海軍々醫總監が下僚を従え來られ海軍熱を鼓吹された事がある、八八艦隊は當時海軍の要望であるが、少くとも各國の全東洋艦隊總噸數に匹敵するだけの海軍擴張を推進している狀勢だから、諸君も國のため海軍に身を奉じてもらいたいとのことであつた、胸に大勳章をつけ、堂々たる威容を備へての話は可成の憧れを誘つた、朝には亞細亞の花を賞し、夕には歐米の月を眺む豪快味は海軍ならでは、と結んで教室を去つた情景も思出の一つであつた、或日猪子校長が全校生徒を集め、外人の内地雜居實施に伴う、國民として、學生としての心構へに就て一場の訓話があつたこともある、京都帝國大學が創設され、次で醫學部附屬病院が完備し、その頃、坪井次郎京都醫科大學長は、市公會堂でベスト講演があり、醫科大學の威容振りを味い本學の前途に暗影を覺えたが、無事島村校長の卒業證書を貰つた、先生の偉大なる聲望と、本學出身諸先生の奮勵とが當局の善處を招き、年替り星移ると雖も歷代の首腦其人を得、所謂京大、府大鴨水をさし挾んで兩々相磨き相勵む今日の偉觀振りは眞に學都の華で、本學を母校とするもの齊しく敬仰措く能わざる所である。

十九 文

献

一、本學中央圖書館所藏未整理古文書（卷末附錄參照）

一、京都府醫學校 校員履歷 本學圖書館藏

一、京都府立療病院第一次年報 明治十八年三月

- 一、京都醫學會雜誌 自第一號 明治二十一年一月 至第一六二號 明治三十四年七月
- 一、京都府立醫學校々友會雜誌 自第一號 明治三十年一月 至第三二號 明治三十六年十月
- 一、我校沿革史 梅原信正編 京都府立醫學專門學校々友會雜誌 第四八號 明治四十一年十二月
- 一、京都府立醫科大學一覽 昭和十六年
- 一、京都府立醫科大學々友會々員名簿 昭和二十三年四月
- 一、京都醫事衛生誌 自第九號 明治二十七年十二月 至第一〇號 明治三十六年五月
- 一、京都府誌 上・下 大正四年十月
- 一、京都府會沿革史 明治三十年十一月 京都府
- 一、京都府治要覽 昭和二十三年 京都府
- 一、日本醫學史 富士川游著 明治三十七年十月
- 一、明治時代京都醫事年表 中野操著 日本醫史學雜誌 自第一二八九號 昭和十六年三月 至第一二九三號 昭和十六年七月
- 一、皇國醫事大年表 中野操著 昭和十七年二月 南江堂
- 一、醫家人名辭書 竹岡友三著 昭和六年九月 南江堂
- 一、醫學博士學位論文要旨全集 中村恒治編 大正七年五月 同頒布所
- 一、山本覺馬 青山霞村著 昭和三年十二月 同志社
- 一、明治文化と明石博高翁 田中綠紅著 昭和十七年六月 明石博高翁顯彰會
- 一、京都大學史 昭和十八年十二月 京都大學
- 一、京都市醫師會五十年史 昭和十八年十二月 京都市醫師會

一、開國五十年史 伯爵大隈重信撰 明治四十年二月

一、京都府醫學校時代の主なる先生を偲ぶ 土屋榮吉 京都醫學會雜誌 四卷八號 昭和二十八年八月

一、京都府醫學校時代の學友を偲ぶ 土屋榮吉 同誌 四卷十號 同年十月

一、我國最初の十二指腸虫發見——主として H. B. Scheube の十二指腸虫體發見に就て 横田樓 衛生動物第四卷 特別號 小林晴

治郎博士古稀記念祝賀誌 昭和二十九年三月

二十 跋

京都府立醫大八十年の輝かしい歴史は、之を第一療病院時代、第二醫學校時代、第三醫學專門學校時代、第四醫科大學時代の四期に區分して回顧するとき、第一期・第二期は正しく本學の黎明期である。思えばこの黎明期に本學興隆の礎石が確と据えつけられたのである。私は黎明期後半の醫學校時代二十有四年に亘って、本學に賦與せられた革新的の嚮導者、また達識の學者、明敏なる校友等數多の先覺に、深厚なる尊敬と報恩の誠を捧げる。而してかくも尊嚴なる礎石と、比類なき傳統の上に樹つ本學は、學勳高く毅然として悠久に聳えるであろうことを確信する。

さきに本學八十年史編纂の企あるや、その任を荷いし委員長川井銀之助教授は、勝學長を唆かし、恰もこの時代に出身したるの故を以て、老齡、余の如きに醫學校時代史の編纂を委ねんとした。余もとより之を固辭したるも、畏友中野操君の慫慂もありて到頭受諾するの羽目に陥った。しかし委員長はその償として余に配するに、醫動物學教室佐藤淳夫、小兒科教室三宅宗隆、解剖學教室藤田尚男の三學士を以てした。三氏は學究の繁忙裡を差し繰り、一致して

眞摯に、或は雜駁なる文献を涉獵記錄し、或は屢々合議し、或は草稿を作成する等に努め、余も亦何回となく本學圖書館に出入し、彼此蒐集したる資料を綜合して、茲に漸く本學の黎明期後半、京都醫學校々史の梗概を編纂し了つた。稿成りて未だ粗漏なるを免れざるも、此上遷延するを許さず、遂に脱稿した次第である。本稿の體裁は余の想定になるものであり、稿中もし過誤ありとすれば、それは全く余の不都合に歸するものである。

終にのぞみ、協力者佐藤、三宅、藤田三學士の努力に對し深甚なる謝意を表する。また、この仕事を慫慂し、終始助言を惜まざりし中野操博士に深謝する。尙また圖書館主任赤星軍次郎君が、煩を厭わず此調査に協力せしその勞を多とする。最後に私共は本學八十年史編纂事業をめでたく完成したる委員長長川井教授と、副委員長格の横田學士に深厚なる敬意を表する。時に昭和二十九年五月